２０２０年１２月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ名古屋拠点放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「わが町の病院がなくなる？～“再編・統合”の衝撃～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	稲村　　修	（魚津水族館館長）
副委員長	東　　惠子	（東海大学名誉教授）
委　　員	井口　昭久	（愛知淑徳大学健康医療科学部教授）
	岡安　大助	（中日新聞社取締役）
	榊原　陽子	（株式会社マザーリーフ代表取締役）
	坂田　守史	（(株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
	松田　裕子	（三重大学副学長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	安井　香一	（東邦ガス(株)代表取締役会長）

（主な発言）

＜ナビゲーション「わが町の病院がなくなる？～“再編・統合”の衝撃～」
（総合　１１月２９日(金)放送）について＞

○　病院についての問題といえば、救急車がたらい回しにされたり、長時間待たされたりといったイメージを持っていたため、なぜ再編・統合という話になっているか疑問を持って番組を見た。発表された公立・公的病院の再編・統合のリストは、新しい病院や有名な病院なども挙げられていて、意外に感じた。厚生労働省の担当者が、リストを議論のベースとして活用してもらえばよいと言っていたが、取って付けたような受け答えに見え、厚生労働省を批判するような編集だと感じた。問題の原点は高齢化や人口減少、地域格差、過疎化などにあり、人手不足や過重労働も問題の原因であると思った。「コンビニ受診」ということばは初めて聞いたが、的を射た表現だと思った。疾病を抱え暮らしている高齢者が、ついつい早めに病院に行きたくなる気持ちは理解できるが、できるだけ適切に病院を利用してもらうためには、いざというときにすぐに病院へ行けるような交通手段の確保といった具体的な問題を解決しなくてはいけない。特に地域医療において、５ＧやＡＩといった技術的な側面から医師をサポートす

る取り組みの紹介などがあるとよかった。地域住民の工夫や努力を紹介した３つの事例はとてもよいと思った一方で、本来は、国や自治体がこうした役割を担わなければいけないのではないかと思った。

○　リスト発表には大きなインパクトがあり、地域にとって大きな問題であるため、今回取り上げたことはとてもよかった。ただ、番組冒頭の問題提起と最後に導かれた結論がつながっていなかったため、全体として分かりづらい内容になってしまった。これは、冒頭のリストの発表に関して、厚生労働省を批判するかのような描き方になっていたからではないか。厚生労働省の思惑やリスト発表の背景を番組の起点にするのではなく、医師不足や赤字経営、医療費の増大など地域医療の根本的な問題を導入にして、住民の意識を変えることや自ら地域医療を守る方法、医師の適正配置のマネジメントなど、問題を解決するためのヒントを探っていく構成にしたほうが、シンプルで分かりやすかったのではないか。

○　患者の「死ねというのか」というインタビューから番組が始まり、リストに対する問題提起と受け取った。しかし結論が住民自身で努力するということで終わっていたため、提起された問題と結論のつながり、番組の伝えたいことが分かりにくかった。一方で、「議論のベースになれば」という厚生労働省の担当者の発言を踏まえ、さまざまな視点からの意見や解決策が提示されており、視聴者に委ねるという意味では、番組を見た人がそれぞれの立場で自分のこととして考えるきっかけにはなったと思う。２次元バーコードが表示され、そこにアクセスすると対象の病院を確認できる仕組みは親切でよかった。番組を見ていて気になる情報を補完する、今の時代だからこそできる情報提供の方法だと思った。

（ＮＨＫ側）

厚生労働省のリスト発表で、地方の病院がなくなるかもしれないという話題が出てきたことをきっかけに制作した。住民にとって地域医療が今後どうなっていくのか考える機会になると考えた。住民自身で考えなくてはいけないということ、住んでいる地域をよくするためにみずから行動しなくてはいけないことを伝えたかった。医師不足など、地域医療の背景にあるさまざまな問題を起点に番組を構成することも考えたが、放送時間の制限や取材の状況から今回のような構成にした。病院だけの話ではなく、交通手段の問題など地域全体の問題として考えてほしいと思っているが、今回は番組に入れ込むことができなかった。賛否あるテーマであるため、たとえばゲストを数名招き、スタジオで議論してもらうなどして、話を深めていきたい。

○　視聴者に考えてほしいという問題提起はよい。また、それに対し反発的なコメントが生まれることもよいと思うが、その先の議論に踏み出さなかったことを批判したい。住民の方に考えてほしいというが、「住民」とは、一般的な不特定多数のことなのか、高齢者や高齢者を支える人たちを特に指しているのか。それによって番組の切り口は変わってくる。そこが、すごく曖昧だったこともあって、実情をうまく描けなかったのではないか。ただ、それぞれの病院の事例は非常に幅広く、医療関係者が見る番組としてはよかったのではないか。２次元バーコードから番組ホームページにアクセスでき、厚生労働省のリストに含まれる中部地方の病院が一覧で参照できること自体は親切な対応だが、その情報の形態がよくない。リストは画像で掲載されており、解像度も悪く、ユーザビリティやユニバーサリティを考えると、とても使い勝手が悪い。今回に限らずアクセスした先の情報が非常に不親切であることが多い。番組は、公立・公的病院の再編・統合をきっかけとしていたが、山間地の医療やもっと厳しい現実に直面している小さな病院にも触れるべきだったのではないか。

○　番組を見て、憤りを感じた。医師不足については地域の偏在があることは確かだが、都市部においては医師が全く足りていない。医療機関が分散したからではなく、これまでの国の方針で医師の数を絞ってきたことに起因するということを制作者が認識できていなかったのではないか。まだ議論の途中で何も決まっていないにも関わらず、番組でリストを取りあげたことで、患者やそこで働く人に対して勘違いや無用の不安を与えてしまうのではないか。病院がなくなると決まったわけでもないのに、患者の「病院がなくなると、片道２時間通わないといけない」というコメントや、バスは１日３本しかないと時刻表まで写して紹介していたことは不安をあおり、問題を大きくしようとする全く必要のないシーンだった。また、都心部の状況について触れていなかったことも不満だ。地域により事情は全く異なり、都心部ではいつも満床で、手術を受けたくともなかなか受けられないのではないか。都心部の現状を全く無視して、都心部でも再編・統合は起きるかもしれませんと紹介するのは非常に無責任ではないか。公立病院とは成り立ちが異なる公的病院も同様にリストに入り、迷惑を被っているという現実もある。全体を通して、取材が足りないと感じた。

○　３つのテーマで構成されていた。厚生労働省のリスト発表をめぐる病院と患者の反応、厚生労働省の見解、ニーズに合わせた改革の事例を挙げ、今後の病院の生き残りの方策を提起していた。医療は機会均等であることが当然であると人々は思っているが、格差は広がってきている。医師の偏在が進み、都心部においても医師不足は深刻で、医療の質も地域により、大きな差が出ている。病院の再編・統合を進めなければ、やがて医療は崩壊してしまうと思う。一方で、このまま再編・統合を行わなければ、患者がいない地域の病院には医師はいなくなり、病院は存続できず、さらに遠方の都

心部へ行かなければならなくなる。厚生労働省のリスト発表の唐突感は免れないが、番組で紹介された住民の医療参加などは、その場しのぎに見えた。今回の番組は、ニュース性はあったが、内容は表面的だった。病院の再編・統合の課題について、ＮＨＫは腰を据えて取り組んでほしい。

○　高齢化が進む中、リストの発表があったことに驚いた。赤字経営、医師不足と医療が崩壊する可能性があるということは分かるが、国民を尊重していないかのような突然のリスト発表に対して、意図や真意をまずは問いたいと怒りに似た感情を覚えた。厚生労働省のインタビューにあった､地域の中で議論してもらいたいという言い方が、上から目線で驚いた。対象の病院に対しては、今までどれだけ指導や助言などを行ってきたのか、これまでのプロセスを知りたいと思った。番組の後半では地域のさまざまな事例を挙げ、取り組みの様子が紹介されていて、分かりやすかった。医師の派遣ネットワークによる負担軽減や、学会出席によるスキルアップ、研修医を常時受け入れる体制の構築など、紹介された先進事例には、これからの地域医療の希望を見いだすことができた。人材育成としても大変よい場となっていて、若い医師の安心した表情を見て、それぞれの立場で皆が幸せになる関係と仕組みづくりがこれから必要なのだと思った。また、住民みずから地域の医療機関をサポートするという取り組みの紹介は、課題解決にむけたよい内容だったと思う。医療だけでなく他分野においても、地方の衰退は見過ごせない問題であり、ピンチをチャンスに変える仕組み作りや知恵を今後も取り上げてほしいし、人に寄り添い、人を育てて、明るい社会を築いていくような、情報インフラとしての役割を期待している。

○　厚生労働省の担当者のコメントは、上から目線で無責任な印象を受けた。地方の公立・公的病院の問題として、医師や看護師不足を掲げていたが、現状を招いた国の責任も大きいのではないかと思った。だが、公立・公的病院の運営に金銭的な問題があるのも事実だろう。さまざまな改革をしている病院の事例紹介は有意義に感じたが、紹介された病院の中には、建設時から必要性に疑問を呈されていたものもあり、官民を含めた地域医療の本来の姿を考えることなく取り上げているようにも見えた。また、再編･統合を考える上で、医師や看護師の数だけでなく、医師の評判も医療機関を評価する大きな要素であるため、現状はもっと複雑だろう。岐阜県と富山県の事例が多かったが、ほかの地域なども取り上げ、今後はもっと深掘りした番組を作ってほしい。

○　公立・公的病院の多くが再編・統合すべきと発表され、知っている病院もあり驚いた。厚生労働省の説明では、赤字経営や医師不足が続いていて、このままでは破綻してしまうということだったが、病院がないと日々の暮らしに不安が募り、結果的にその土地を離れざるを得なくなるのではないか思った。対象となる病院の多くが、存続のためにさまざま

な努力をしていることが紹介されていた。病院がなくては生活ができない、地域の消滅につながるという思いが、切実な取り組みにつながっているのだと思う。医師の派遣や研修医を受け入るなどの取り組みを初めて知り、その実情と努力には深く感心した。ただ、多様な問題がある中で、一律に再編・統合を進めてよいのだろうかと感じた。民間の病院も含めて選べる状態にあればよいが、地域を支える病院が無くなることは死活問題であり、簡単に結論づけられる問題ではない。

○　「存亡の危機に立たされている」という表現は、内容と合っていなかった。国の発言が本当なのか追及してほしかった。一方で、再編・統合について「私たち自身ができることは何なのか、そのヒントを探る」という表現は正しいと思った。医療環境が行き届かない地域で、経営が厳しい中、医療を提供している公立・公的病院に対し、存立危機をあおるリストの発表は暴挙だと感じていたので、「それぞれの経営主体が決めること」とはっきり言っていたことはよかったと思う。インタビューを受けていた厚生労働省の課長が悪役のように見え、発言内容も悪くないと言っているようで、もっと強く追及してもよかったのではないかと思った。多くの市民の声を拾い構成してくれたことはとてもよかった。富山のバスの時刻表や片道２時間以上というナレーションなど、地域の病院が置かれている環境を実に端的に表していて、すばらしい演出だと思う。「治療から予防へ」「医師の適正配置」「住民主体の病院運営」という地域医療を守る３つのヒントが提起されたが、いずれも分かりやすい例示で、理解しやすかった。富山県の病院がバージョンアップに取り組んだという事例は分かりやすく、再編・統合と異なる発想で、ダウンサイジングとの違いを明確に示してくれた。「今、手を打たないと地域の医療が崩壊しかねない」「再編・統合は地域の消滅を加速する」「医療なき地域はあり得ない」というフレーズが繰り返し述べられ、地域医療を考え直すよい機会を提供してくれた。２次元バーコードで病院を確認しながら番組を見てほしいと紹介していたが、病院名が列記されているだけで、内容にもの足りなさを感じた。

○　リストが突然発表されたということについて、当初はひと事として捉えていた。進む高齢化などによって、病院の経営は順調だと思っていた。研修医が先輩医師からアドバイスを受けることが紹介されていたが、とてもよい取り組みだと思った。雪深い気候の地域や山間部の病院から、新しい病院に替えるということは高齢者にとってとても厳しいことだと思った。「赤字経営、医師不足、医療崩壊」というのは、本当に驚きで、わが事として考えてみようと思った。

（ＮＨＫ側）

２次元バーコードによる情報提供については様々なハードルがあるが、引き続き知恵を絞り工夫していくことで、より視聴者が満足できるコンテンツ作りに努めたい。地域医療の大切さについては皆が同じ思いを持っていると思うが、置かれた立場や居住している地域など、この問題に対する見方は人それぞれで、何を課題だと考えるかも同様である。賛否両論があるこの問題を今後も引き続き議論していくことが重要だと考えている。各委員から活発に問題提起していただいたこの場のような議論を番組でも展開したい。今後の番組作りに反映させていただきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月１日(日)から８日(日)のＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」は、とても印象深く心に残る内容で、教訓となる番組だった。ドラマの中で、地震発生から時間の経過によって段階的に変化する被災の状況を紹介していたが、マンション倒壊などさまざまな映像がリアルで感嘆しながら見た。政治経済やＳＮＳ情報の信ぴょう性、報道の役割など、たくさんの要素が入り混じる中でさまざまなことを判断、報道することの大変さが伝わり、目を見張る内容だった。被災ツリーは、地震が起こった時の火災や建物崩壊、群集雪崩など、どういったことが起こるのかを体験しているかのように伝わってきたので、どう対処すべきかなど、関心を持って見ることができる演出だったと思う。いざというときの知識を与えてくれて、意識も高められる番組だった。全国各地の住民どうし、地域コミュニティーによる取り組みも紹介されており、参考になる内容だった。身寄りもなく、歩くこともままならないため、発災時には逃げられないと諦めていた人が、地域の取り組みに参加することで、頑張って生きようと意欲を見せていたことがとても印象的で、地域コミュニティー再構築の可能性を示唆しているようにも感じられた。ＳＮＳで寄せられた視聴者の意見や知恵を紹介するといったインタラクティブな手法、出演者の人選もよかったと思う。同じ時期に「たっぷり静岡」でも関連する内容が取り上げられていたが、何度繰り返し放送してもよい。地震だけでなく台風などの災害に対して、さまざまなメディアを駆使して減災につながる報道を続けてほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「シリーズ　体感　首都直下地震」を見た。「みんなで考える防災」というコンセプトがとてもよかった。「プロローグ」がうまくまとめられていたので、初日だけ見ても十分に理解が進む内容だったと思う。ＮＨＫスペシャルだけでなく、ほかの番組でも関連する内容を放送していたので、ＮＨＫが本気で伝えようとしているのだと感じた。こういった番組を放送することがＮＨＫの存在意義でもあり、

とてもよいチャレンジだと思う。「ＤＡＹ１」のドラマにとても引き込まれ、続きが気になって「ＤＡＹ４」まで毎日見た。地震や防災をテーマにしたドラマは、とても斬新でリアリティも感じられた。ドラマを通して追体験した視聴者は、より自分の事として考えることができたと思う。一方で、スポンサーとの関係を描いた場面は、どういう意図で入れているのか分からなかった。また、スタジオの出演者どうしの会話には深刻さが感じられず、違和感があった。

○　１２月６日(金)のＮＨＫキャンペーン「災害列島　生きるスキル」「巨大地震　あなたの町の“地域リスク”」(総合 後7:30～8:42)は、いかにして犠牲者を減らすかに焦点を絞り、各地に存在するリスクや減災に向けた取り組みを詳細に紹介しており、よい内容だった。ゲストの専門家が「きょうは各地の取り組みの“自慢大会”だ」と言っていたが、まったくその通りで、ほかの地域の取り組みを参考にしながら自分の地域のことを考える、そうしたことが広がっていけば犠牲者を少しでも減らすことにつながると思う。液状化が起こると避難が遅れることや堤防が壊れることなど、命に直結する問題が取り上げられていて、とてもよい番組だった。

○　１２月８日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　体感　首都直下地震「災害に耐える社会へ」でも減災に向けた各地域の取り組みを紹介していたが、それを見ていた若い出演者が、「私たちには何もできない」といった発言をしていたのは残念だった。また、アナウンサーが一極集中について言及していたが、もっとも重要な問題だと思う。この問題の解消に向けた報道を続けていくべき。

○　「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」は、昭和の時代に感じた興奮と郷愁を期待して見始めたが、物語に入り込むことができないまま終わってしまった。出演者の画一的な絶叫ばかりが目につき、時代の展開にもついていけなかった。落語のパートとオリンピック開催に至る物語もかみ合っておらず、違和感を覚えた。

○　１１月２７日(水)の「黄色い煉瓦～フランク・ロイド・ライトを騙した男～愛知発地域ドラマ～」を見た。職人と夫婦、親子の営みが叙情豊かに描かれた秀作だったと思う。ドキュメンタリー風の展開も物語を分かりやすくしていた。フィギュアスケーターの村上佳菜子さんの演技は新鮮だった。田舎のわびしさを醸し出していたカメラワークも、音響効果もよかった。主人公は糖尿病を患っていたが、ドラマが設定している時代には病気の原因はわからず、治療法もなく、血糖すら測られていなかった。主人公が波打ち際で足がぬれていることに気づかなかったのも糖尿病の神経障害の症状であり、足の感覚がなくなって、いずれ切断することを予見させるシーンだった。医学的にも十分鑑賞に堪えうる作品だった。

○　１１月２０日(水)のクローズアップ現代＋「“もしもし革命”進行中！～いま電話になにが？～」を見た。簡単なことはＡＩに任せ始めている時代だが、人による電話受付の大切さを扱った番組だった。電話応対を訓練することで、人との接し方や日常の会話が優しくなるなど、とてもよい話が紹介されていた。若い人が会社でなかなか電話を取れないということをよく聞くが、それを「電話イップス」と表現していたのは興味深かった。内線電話を２時間禁止したことで仕事の効率が上がったという話も、目からうろこだった。ＡＩについて正しい認識を持つことにもつながる、よい番組だったと思う。

○　１１月２９日(金)の越中とやまスペシャル「目指せ！シニアスター」(総合 後7:56～8:41　富山県域)を見た。充実したシニアライフを送るための講演会を番組にしたものだったが、ゲストの話がとても上手だったこともあり、楽しく見ることができた。ＮＨＫらしい落ち着きのある良い番組だった。ほかの都道府県でもこのような番組を制作し、充実したシニアライフにつながる番組を全国的に放送するとよいと思う。

○　１２月５日(木)の所さん！大変ですよ「見てよし！食べてよし！　(珍)深海魚　大集合」を見た。番組で紹介されていたオキナワクルマダイは、正確には深海魚ではないと思う。十分に調べているのか疑問に感じた。出演者が深海魚のミドリフサアンコウに息を吹き入れて膨らます場面は、パフォーマンスとしてはよいのかもしれないが、気持ちの悪い映像だったと思う。そもそもこの番組は、ＮＨＫが作るべき内容だったのか疑問が残った。

○　１２月１５日(日)の目撃！にっぽん「元受刑者　“再生”への日々」を見た。紹介されていた会社では、元受刑者を雇用して、まずは仕事と住む場所を提供するという非常に良い取り組みをしていると思った。しかし、会社側の元受刑者に向き合う態度が高圧的に感じられて、ほかの元受刑者がこれを見たときにどう感じるかを想像すると、見るに堪えない番組だった。失敗が許されないという日本の社会的な構造が、いまだに改善されていないことをまざまざと見せられたように感じた。もっとも気になったのは、タイトルに「更生」ではなく「再生」という言葉を使っていたこと。番組の最後のインタビューで会社の社長が「更生」と言っていたのに、ナレーションでは「再生に向けた模索の日々が続く」と結んで終わっていた。番組は「再生」とはほど遠い内容だと感じていたので、とても違和感があった。

○　１２月１５日(日)の日曜討論「吉野さん　ノーベル賞受賞　どうするニッポンの科学技術」を見た。日本の研究力が落ちてきていることは誰もが認めるところであり、現状を打開するためには、原因を掘り下げる必要があると思う。今回の出演者であれば、真相に迫る討論が展開されると期待したが、現状を追認するだけで終わってしまった。政策を考える人と実際に研究する現場の人が直接対話するせっかくの機会だったのに、議論が深まることはなく、精神論で終わってしまったのは、とても残念だった。

○　１２月１６日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で都道府県が用水路の事故防止対策を行う費用を全額補助するというニュースを見た。このようになったのは、富山県などが国へ対策の要望を出したからとのことだったが、ＮＨＫの報道が国に影響を与えたのだと思う。全国の死者数などのデータがない中で、ＮＨＫが独自の取材で状況を明らかにし、繰り返し報道してきたことの成果で、すばらしいことだと思う。

○　１２月１８日(水)の「あさイチ」放送中に緊急地震速報が出て、すぐにそのニュースを伝えたのは良かった。ただ地震のニュースを１０分以上放送していたが、震度４の地震はそれなりの頻度で発生しているので、津波もなくて被害もなければ、同じ情報を何度も放送する必要があるのか疑問に感じた。ある程度見極めをして、もう少し早めに元の番組に戻してもよいのではないかと思った。

○　１２月７日(土)のＥＴＶ特集「武器ではなく　命の水を～医師・中村哲とアフガニスタン～」を見た。丁寧な取材で中村医師の志や思いを紡ぎ、映像とインタビューで見る人の心をつかむような、とてもすばらしいドキュメンタリー番組だった思う。１２月１０日(火)のクローズアップ現代＋「中村哲医師　貫いた志」の前半はＥＴＶ特集と同じような内容だったが、途中は、その後のことをきちんと取り上げていて、とてもよい番組だった。ゲストの慶應大学大学院の田中浩一郎教授が「戦闘員を助けることは内戦を長引かせることになる」というようなことを言っていたが、ふた言しか話していなかった。教授の意見が深掘りされることもなかった。人道支援や国際紛争は難しい問題なのでさまざまな視点から伝えてほしいし、せっかくスタジオに来てもらったのだから、中村医師の活動について肯定的な話ばかりでなく異なる観点からの意見も、もう少し聞きたかった。全体としてはとても意義のある番組であり、さすがＮＨＫだと思える内容だった。

○　１２月１８日(水)のガイロク(街録)「山あり谷ありの人生、波乱万丈の感動物語」を見た。ＮＨＫならではのすばらしい内容だった。コンパクトに制作されたシンプルで好感の持てる番組だった。

○　１１月２４日(日)の今夜も生でさだまさし「～岐阜ミーちょうだいませませ～」を見た。地元民放のスタジオからの放送で、民放の会長が番組冒頭に出演していた。そのまま番組終了まで客席にいたことに気を遣ったのか、いつもの軽快さが少しトーンダウンしているように感じた。番組の終盤では「麒麟が来る」に関連して、岐阜県についてスマートに紹介していたことや、東京オリンピックの表彰状に美濃和紙を使うことを取り上げていたのは、とても嬉しくありがたかった。

○　１２月１日(日)～８日(日)の「ＮＨＫスペシャル　シリーズ　体感　首都直下地震」では、首都直下地震の怖さやどう対処したらよいかなどを放送していた。日を追って次々と発生する問題をいろいろな角度から提起し、私たち自身が日頃から行っておくべき必要な対策などを微に入り細に入り納得できるようにかみ砕いて伝え、ＮＨＫでなくては作れない番組だったと思う。南海トラフ巨大地震が近い将来起こると伝えられても、どうしてもひと事と思ってしまっていたが、その考えを改め、防災訓練などにも積極的に参加しなくてはいけないと思わせるよい番組だった。

○　１２月１日(日)の小さな旅「山の歌　秋　岩壁　峻（たか）く～鈴鹿山脈　御在所岳～」を見た。ゲリラ豪雨で倒壊した藤内小屋の再建のために、全国からボランティアが集まった話はよかった。改めて愛された山小屋なのだと思った。登山口から山頂まで登山する際、藤内小屋を通る場合と地蔵岩を通る場合では異なるルートになるのに、同じルートで行けるように受け取られかねない伝え方だったと思うので、地図を表示して位置関係を分かりやすくしてほしかった。御在所岳がロッククライマーの修業の場と紹介されていたことに違和感があった。確かに藤内壁はそうかもしれないが、山全体としては幅広い人たちが登山を楽しめる場所だと思うので、一部そういった場所もあるというような紹介が適切だったのではないか。

○　１２月１５日(日)のいだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～（４７）「時間よ止まれ」（総合 後8:00～9:00)を見た。シリーズ全体を通して、明治と昭和を行き来していたので分かりづらかったが、最後は昭和３９年１０月１０日に収れんし、主な出演者が勢ぞろいの豪華な内容だった。古今亭志ん生が、どういった意味合いで登場していたのか、最後までよく分からなかったので、語りだけの出演にとどめるべきだったのではないか。また、五りんの登場はドラマを複雑にしただけではないかと思う。事務総長を解任された田畑が無人の国立競技場にいたり、重要な場所に顔を出したりするのは現実的ではなく、大河ドラマのあるべき姿ではないと思う。東京オリンピックを盛り上げるために放送されたと思うが、その効果はどうだったのか。番組そのものをおもしろく見せたいという思いのほうが勝ってしまったのではないかと思えてならない。

○　１２月１３日(金)のいしかわ令和プレミアム「きょうのマッスルスペシャル！」(総合 後 7:30～7:57)を見た。以前、「かがのとイブニング」の中でも筋トレを取り上げてびっくりしたが、今回はＮＨＫ金沢放送局からの生放送、出演者が全身の筋肉を鍛える番組で、ゲストの庄司智春さんが元気で楽しかった。アナウンサーが筋トレに挑戦していたが、痩せていたころの写真が紹介されるなど、親しみの持てる演出だったと思う。番組後半に少し元気がないと感じる場面もあったが、全体を通して楽しく勉強ができる、役に立つ番組だった。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０１９年１１月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ名古屋拠点放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、ナビゲーション「ＡＩが中小企業を救う～データの力を経営に生かせ～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	稲村　　修	（魚津水族館館長）
副委員長	東　　惠子	（東海大学名誉教授）
委　　員	井口　昭久	（愛知淑徳大学健康医療科学部教授）
	岡安　大助	（中日新聞社取締役）
	坂田　守史	（(株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
	玉井　博祐	（能楽師／玉井屋本舗社長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	松田　裕子	（三重大学副学長）

（主な発言）

＜ナビゲーション「ＡＩが中小企業を救う～データの力を経営に生かせ～」
（総合　１０月２５日(金)放送）について＞

○　タイトルの「救う」ということばは、もう少し穏当な表現にしたほうがよかったのではないか。また内容についてもロボット掃除機を紹介したシーンは、騒々しいだけで何を伝えたいか分からなかった。反対に、これまで人間が経験則で行っていた飲食店の来客予測を、高度なデータ分析によって高精度に行うというＡＩの特徴について、具体的事例を交えて説明されていたので、分かりやすかった。これまでＡＩの活用は大企業だけのことだと思っていたが、中小企業でも簡単に活用できるということを、分かりやすく説明していたと思う。よい面が多く紹介されていたが、悪い面についても触れてほしかった。ＡＩの活用で残業が少なくなることや、食品ロスが減るのはよいが、長年の経験で得ていた知見が簡単に手に入ってしまうことで、単純労働者が増え、ひいては人間の働く機会が奪われかねない恐ろしさも感じた。農林水産業での事例も多く紹介されていて、人手不足の課題を抱える中でとても参考になると思ったが、中小企業を救うというタイトルでひとくくりにして語られていることには違和感を持った。技術的にも金額的にもハードルが非常に低くなっているので、老舗食堂や高

専生でもＡＩを開発することができ、さらにそれを販売するなど、新しい取り組みが進んでいることには驚いた。ＡＩに関する用語については、もう少し丁寧な説明があるとよかった。

○　冒頭、大企業での活用や囲碁・将棋のソフトなどで話題になったＡＩが中小企業にも広がっていることが紹介され、興味をそそられる出だしだった。もともとＡＩにたけていたわけではない一般的な飲食店でも、来客予測に活用できていたので、病院などのほかの分野でも気軽に利用可能だと思った。また、なぜこれほど高い精度で予測可能なのか興味が沸いた。ＡＩ開発のハードルが急速に下がっていて、思いもよらぬところでＡＩが活用されていることが新鮮であり、気楽にみられる番組となっていた。ただ、専門家の間でもどこまでがＡＩなのか意見が分かれているとのことだったが、現在、一般的に認識されているＡＩがどういうものなのか、もっと説明してほしかった。また、「ディープラーニング」、「オープンソース」の意味や、プログラムを書かなくても開発できる理由について、もう少し解説してほしかった。

○　紹介されていた食堂ではＡＩを経営に生かしていたが、救われたわけではないので、タイトルの「救う」ということばに違和感を抱いた。また、農業や漁業など一次産業の経営は中小企業と同じではないため、中小企業の事例と関連づけて解説していたことにも違和感があった。食堂のご主人は、様々な経営課題に向き合うために、ひとつのツールとしてＡＩを活用していたはずだが、ＡＩ導入の結果ばかりが強調されており、経営課題を解決するために、どんな風にＡＩを開発し、どうやって経営に生かしたのかというストーリーがなかったことには物足りなさを感じた。また、働き方改革に寄与したことや従業員の満足度アップ、他企業との協力など、大切だと思われることが紹介されていなかったのではないかと感じた。ロボット掃除機のシーンは無くてもよく、アナウンサーはハイテンションで驚いた。ゲストの武蔵野大学データサイエンス学部の中西准教授は個性的なキャラクターでよかった。ＡＩを十分に機能させるためには、それを使う人も重要なのだというメッセージを発しており、とてもよい解説だった。多くの事例を詰め込みすぎていると感じたので、中小企業に関係するものに絞ったほうが分かりやすかったのではないか。

○　ＡＩの活用が手軽になることは、中小企業にとって希望が持てることだと思う。なぜこれほどまでに高い精度で食堂の来客予測ができるのか驚くとともに興味を持った。膨大なデータを、どのように扱い、ＡＩに学習させていくのか、もっと具体的に知りたかった。ＡＩの活用によって、翌日の売り上げ予測を精密に立てられることはよいが、その予測値が経営者にとってはプレッシャーになり得ると感じた。ＡＩ開発のハードルが低くなっていくことは楽しみだが、経営するうえで、どう活用し、何を効率化

すればよいかは、今後の課題だと感じた。

○　ロボット掃除機のシーンでは、アナウンサーのテンションの高さに違和感があった。ＡＩによる来客予測の的中率には驚いた。従業員の勤務管理が簡単になり、食品ロスを減らすこともできるなど、ＡＩの活用による効果が広がっていくことはよいと思う。また、若い社長や店長がＡＩを活用し、今までになかった工夫をしていることは、すばらしいと思う。紹介された食堂は伊勢神宮の近くで人が集まるため、多くのデータが集まり、ＡＩを活用できたのではないかと思ったが、他企業でも同じシステムを活用できているということだったので、汎用性があることも分かった。どのようにデータを収集し生かしているのか、もう少し具体的に知りたかった。データの処理はするが、その意味までは理解していないはずのＡＩが、ここまで正確な未来を予測してしまうことを、最初はすばらしいと思ったが、活用方法によっては、間違った行動につながりかねない恐ろしさも感じた。

○　番組で紹介した事例がありすぎて、何を伝えたいのか、意図が分かりづらかった。食堂の取り組みをきっかけにして、中部地方の中小企業を２～３社に絞って取り上げ、より深掘りしたほうがよかったのではないか。フードロスの問題や、水産業における過剰なエサやりによる水質汚染についても触れられていたが、経済効率的な側面だけでビジネスを語る時代はもう終わったと思っているので、そうした社会や環境に対する企業の責任やあり方に、ＡＩやテクノロジーを使ってどのようにアプローチしていくのかが見えてくるとおもしろかったと思う。また、テクノロジーが進歩した未来社会において、人間の意識とか動機、人としての本質がどうなっていくのかということについても伝えられるとよかった。

○　「ＡＩが中小企業を救う」、「データを経営に生かす」というタイトル通りの内容だったと思う。これまで、熟練した人間とＡＩの対決をテーマにしたものを多く見てきたが、この番組はＡＩによるビジネス改革の成功事例を取り上げていて、好印象だった。高専生がＡＩを開発したということや、短時間で格安に開発できることが紹介されていたので、ＡＩ活用に対するハードルが下がり、身近なものとして捉えることができる内容だった。人口減少や格差社会といわれる暗い状況の中で、若い人がプログラミングを学習したりＡＩを開発したりしていることが紹介され、明るい未来が予測される内容となっていて大変よかった。ゲストの人選もよく、スタジオセットもスタイリッシュでぴったりだった。テロップも色合いがよく、見やすくて、デザイン性にも優れていた。

○　中小企業が希望を持つことができる番組タイトルだった。ＡＩを扱うことは難しいと思っていたが、その考えを根底から覆してしまう画期的な内容だったと思う。データやＡＩを活用するにあたり、知識や技術、費用の面でのハードルが急速に下がってきていることがよく分かり、とても勉強になる番組だった。

○　ＡＩはここ数年の技術発展により注目されているが、まだまだ課題があると感じていたので、興味を持って見ることができる番組だった。本題への導入として出てくるロボット掃除機には、古くささを感じた。食堂の事例では、取り組みが大変分かりやすく、オープンソースの活用という、知らなかったことが紹介されていて、新鮮な内容だったと思う。農業、漁業の活用事例についても、地域で取り組んでいることと軌を一にするものであり、さまざまな人にとって参考になる内容だったのではないか。一方で、来店予測の的中率が高すぎるのではないかと感じられ、違和感を覚えた。

○　ロボット掃除機が紹介されていたが、これはＡＩなのかと疑問に感じた。飲食店や学生でもＡＩを開発できるくらいハードルが下がっているということだったが、専門用語などは一般的に知られていないものも多いと思うので、初心者でも分かるように丁寧に説明してほしかった。情報の取り上げ方は、広く浅くなってしまっていたが、番組内容自体はしっかりとしており、最新情報を伝えられていたことはよかったのではないか。ＡＩの普及が広がるにつれて、問題点がどんどん出てきていると思うので、異なる観点からもぜひ取り上げていってほしい。

（ＮＨＫ側）

どの情報をどこまで説明するのかはいつも課題であると考えている。今回は、多くの方にＡＩ活用について理解してもらいたかったので、食堂の社長のみを深掘りして伝えるよりも多くの事例を通じて現状を紹介する構成にした。ＡＩ活用のネガティブな面については番組最後のまとめで少し触れる形にしたが、さらに掘り下げることも重要なので、今後も継続して取り組んでいきたい。

＜放送番組一般について＞

○　「目撃！にっぽん」が好きでよく見ている。１０月２０日(日)の「“神の鳥”ライチョウ　天空の復活計画！」は、ライチョウの絶滅を防ぐために、北アルプスの巣から有精卵をとり、ほとんど姿を消してしまった中央アルプスの雌の巣に移す計画を取り上げていた。「野生動物はそっとしておくことが自然保護というのは間違い」という研究者の発言も紹介されていて、多くの違和感を抱く番組だった。１１月３日

(日)の「おそれず“前”へ～炎鵬　ともに戦う日々～」は、炎鵬関の知られざるエピソードが感動的に伝わってくる、すてきな番組だった。１１月１７日(日)の「激論の“トリエンナーレ”～作家と市民の７５日～」は、作家たちが、自分が何を考え、何を伝えようとしているのかを知ってもらうために努力している姿を追った良いドキュメンタリーだった。

○　目撃！にっぽん「“神の鳥”ライチョウ　天空の復活計画！」を見たが、ＮＨＫで取り上げる内容なのか疑問に感じた。絶滅した場所に１羽現れたからといって、絶滅した理由も明確にせずに殖やそうとしても失敗する可能性が高い。人間が手を入れ続けなければならない状況は自然とは言えないし、特定の生物だけを守るという考え方は危険だと思う。野生動物はそっとしておくことが自然保護というのは間違いであるという出演者の持論も放送していたが、ＮＨＫはそれを支持しているのか。さらに違和感があったのは、ニホンザルがライチョウのひなに危害を加えていることやニホンジカがライチョウの餌となる高山植物を食べていることが紹介されていて、ライチョウを守るためにこれらを駆除したほうがよいという印象を与えかねない伝え方になっていた。ＮＨＫの科学番組のレベルは驚くほど高いと思うが、それ以外の番組で自然などを取り上げているときのレベルは低いように感じる。こうした指摘があると、制作者は、専門家に確認したということをいつも言っていると感じているが、ひとりの意見、特定の考え方だけを根拠にして番組を制作するのは避けてほしい。

○　１０月２３日(水)のクローズアップ現代＋「追跡　関西電力・金品受領の裏で何が？」を見た。高浜町の元町長や元町議会議長から関西電力の元会長や地元業者まで、中核にいる人たちのインタビューが放送されていた。本当は「蓋をしておきたい」ことなのだろうと思えるような証言まで引き出されており、取材者の努力が伝わってきた。関西電力の発表だけではなく、そこからさらに掘り下げられていたと思う。関西電力の金品受領の問題だけではなく、関西電力から地域への「寄付金」の流れなど、問題の全体像を立体的に浮かび上がらせ、また、図などで分かりやすく伝えていた。番組の最後で、電気料金と税金のあり方が問われるとまとめていたが、そこまで踏み込んで伝えていたことはよいことだと思う。非常に関心の高い問題なので、これからも継続して取材、放送してほしい。

○　１０月２５日(金)の「ニュースザウルスふくい」の中のシリーズ「幸福度日本一ふくいの謎」の第９回「新しい『福井型教育』へ」を見た。教育と幸福がどういう関係を持っているのかということが語られていなかったので、分かりづらかった。また、福井県の新しい教育大綱を取り上げていたが、文科省の教育基本方針とどう違うのか、「福井型教育」の特徴なども述べられていなかった。シリーズのコンセプトと内容が

合っていなかったのではないか。

○　１０月２９日(木)のクローズアップ現代＋「人事・転職ここまで！？　ＡＩがあなたを点数化」を見た。内定辞退率の販売問題があったことを受けて制作された番組だったが、企業の採用や人事評価などは、正確性や公平性確保に大変な労力を費やしており、また、人によるアナログな取り組みだけでは、見落としがあったり、主観的な見方になったりしてしまう可能性もあるので、透明性を確保したうえで、ＡＩの導入を検討してもよいのではないかと思った。ＡＩ活用についていろいろと考えさせられる内容だった。

○　１１月１日(金)のナビゲーション「揺らぐ“夢の超特急”～リニア中央新幹線の行方～」を見た。ＪＲ東海の社長が、南海トラフ地震の防災の観点から、輸送の代替手段の確保としてもリニア新幹線が必要だと言っており、新鮮に感じられる内容だった。ＪＲ東海と静岡県の間で行われている水資源を巡る議論を紹介する際、名古屋、静岡放送局の２人の記者がそれぞれの立場でボードを使って説明しており、とても分かりやすかったと思う。とても大きなテーマだが、開発のプロセスやどういった価値基準で選択、判断していくべきなのか、偏りなく提示することは、メディアの重要な役割の一つだと思う。今後も取材を続け、放送していってほしい。

○　ナビゲーション「揺らぐ“夢の超特急”」を見た。リニア中央新幹線について知りたいことは多く、通る場所、移動時間、経済効果、抱えている課題など、さまざまな疑問に簡便に答えてくれた番組だった。静岡県とＪＲ東海で議論している水資源を巡る問題も、２人の記者がそれぞれの立場を的確に説明していた。ＪＲ東海の社長へのインタビューもあり、ニュース性もあった。今後も継続的に伝えてほしい。

○　ナビゲーション「揺らぐ“夢の超特急”」を見た。リニア中央新幹線は、今後の中部地方のあり方を大きく変える可能性があり、関心を引く内容の番組だったと思う。ＪＲ東海と静岡県で話し合いが続けられている開発による河川への影響について、知らないことが紹介されていたので勉強になった。ただ、静岡県に寄った紹介の仕方ではないかと感じられ、とても気になった。

○　１１月８日(水)の「おはよう石川」で、トリミングの競技大会で日本一になったトリマーを紹介しているのを見た。トリマーの技術の高さがとてもよく伝わってくる内容だったと思う。トリミングへの思いなど、共感できる内容もあり、とてもよいリポートだった。

○　１１月１０日(日)のＮＨＫスペシャル　ダビンチ・ミステリー　第１集「幻の名画を探せ～最新科学で真実に迫る～」と１１月１７日(日)の第２集「“万能の天才”の謎～最新ＡＩが明かす実像～」を見た。「ダビンチ・ミステリー」と名付けており、引きつけられるよいタイトルだったと思う。没後 500 年ということで、多くの番組を放送していたことも、とてもよかったと思う。第１集は先の展開が読めたこともあって間延びした感じを受けたが、第２集は見ていて興奮する番組だった。一つ一つの掘り下げ方がうまく、テンポよく紹介されており、最後まで目を離せない構成になっていた。現在でも多く残る謎について、最新の科学技術を駆使して真相に迫っていたが、このように質が高く、スケールの大きい番組作りを今後もＮＨＫに期待したい。ダビンチの表記は、ダ・ヴィンチのほうがよいのではないかと思い、気になった。また、第２集ではヴィンチ村と紹介されていたので、表記が統一されていない印象もあった。

○　１１月１０日(日)・１７日(日)のＮＨＫスペシャル「ダビンチ・ミステリー」を見た。集められたダビンチの手稿をＡＩによって分析して、どういった頭脳、思考の持ち主なのかを明らかにしようとしており、大変興味深く、目が離せない番組だった。さまざまな分野の研究者のインタビューも紹介されており、大変見どころのある番組だった。ダビンチの生い立ちは不遇なものだったこと、そういった中でも、芸術家としての原点が、身近な川の特性にある点などヴィンチ村の原風景にあったと紹介されており、おもしろい内容だった。ただ、ミュージシャンがナビゲーターを務めていたが、この番組の内容を考えると、分析思考をもつ科学者が務めたほうがよかったのではないかと感じた。

○　１１月１４日(木)の「まるっと！」を見た。公立中学校での非常勤講師の残業についての話題などは、解説がとても分かりやすく、すぐれた内容だったと思う。番組が２年目となり、だんだん親しみやすくなってきたと感じている。冒頭で「愛知、岐阜、三重の皆さん」と呼びかけて天気の話で始まり、中盤や終盤でも天気の話題が入る、いつも決まったパターンがあるので安心して見ていられると思う。出演者の会話には展開が予測できないものもあり、ＡＩに取って代わることができない、好感を持てるものだった。この４人でなければ出せない雰囲気があって、魅力的で名古屋放送局の看板番組になってきていると思う。

○　１１月２０日(水)の歴史秘話ヒストリア「そして“能”は生まれた　世阿弥　時代を超える戦略」を見た。番組冒頭、宇宙飛行士の野口さんが出たので違う内容かと思ったが、宇宙に行くときに『風姿花伝』をお守りとして持っていったということだった。さらに、大手通信販売企業の元社長が、経営哲学やビジネスに世阿弥の教えを生かしてきたと言っており、驚きの内容だった。また、世阿弥の能は禅宗の影響を受けてい

たことなど、いろいろなことを知ることができる番組だった。能のことを広く知ってもらえるこのような番組を、引き続き放送してほしい。

○　１１月１０日(日)の日曜美術館「幻の国宝　佐竹本三十六歌仙絵」を見た。以前から、何度も耳にして興味を持っていたものの詳しくは知らなかったので、番組を通して、楽しく詳細を知ることができた。絵巻を切断することによって震災や戦火による消失や海外流出を防いだことや、表装することで新しい芸術として生まれ変わったという解説には感心させられた。さらに、現代の文化人が多く出演していたことや音楽に琴の音を使っていたこと、スタジオセットに和風の切り花が飾られていることから、格調高い番組にも感じられた。

○　１１月１０日(日)の趣味の園芸　選「どっさり収穫！イチジクのオイシイ話」を見た。土作りからよい苗の選び方、植え付けの適期とその方法、せんていのしかたまでがコンパクトにまとめられており、育ててみようと思える番組だったと思う。趣味の園芸にはテキストもあるが、やはり、映像のほうがわかりやすく伝わると思った。番組によっては、専用のアプリをダウンロードすることで、テキスト上のマークをスマホのカメラでかざすと、関連する動画や音声の再生などさまざまな情報に直接アクセスできるようになっており、とてもよい取り組みだと思う。今後、アクセスできる情報をもっと増やしてほしい。出演者が断りもなくイチジクを皮ごと食べていた場面には違和感があった。大丈夫なのか気になってしまったので、皮ごと食べられるといった説明を事前にしてほしかった。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０１９年１０月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ名古屋拠点放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、金とく　中部ネイチャーシリーズ「駿河湾　日本一深い湾を潜る～深海が育む神秘の楽園～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

次に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	稲村　修	（魚津水族館館長）
副委員長	東　　惠子	（東海大学名誉教授）
委　　員	井口　昭久	（愛知淑徳大学健康医療科学部教授）
	岡安　大助	（中日新聞社取締役）
	坂田　守史	（(株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
	玉井　博祐	（能楽師／玉井屋本舗社長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	松田　裕子	（三重大学副学長）
	安井　香一	（東邦ガス(株)代表取締役会長）

（主な発言）

＜金とく　中部ネイチャーシリーズ「駿河湾　日本一深い湾を潜る
～深海が育む神秘の楽園～」（総合　１０月１１日(金)放送）について＞

○　昨年までに放送した同シリーズと内容が似ていると感じられたため、再放送を見ているかのように思えた。大きく分けて７つの話題で構成されていて、それぞれは端的で適切な長さにまとめられていたので、分かりやすかった。しかし、各話題のつながりが分からず、番組全体の結論も分からなかった。自然のよさや景観の美しさがとてもよく伝わり、撮影技術のすごさを感じた。見たことのない深海魚や海中洞窟など、珍しい映像がこの番組のよさだと思う。ただ、出演者のコメントが陳腐だと感じた。

○　水中ドローンを初めて知り、その映像に驚いた。旅人の明るさはよかったが、コメントが「すごい」といった単純な感想だけの場合が多く、残念だった。何に対して、どうしてそう感じたのかなど、もっと具体的に伝えてほしかった。美しい自然をとてもきれいな映像で放送していたので、４Ｋの大画面でも見たいと思った。美しい自然は

保護しなくてはならないと思いながら見ていたので、深海魚漁師が魚を釣り上げて、魚の値段や刺身にするとおいしいなどと言っていた場面が必要か疑問に感じた。漁師のリアクションと深海魚の姿が衝撃的で、番組の内容が印象に残らなかった。

○　駿河湾を美しい映像で映し出し、勉強にもなる内容でよかった。駿河湾に深い海溝がある理由を番組中盤で説明していたが、冒頭にあれば、序盤から興味をもって見ることができたと思う。俳優でありながら潜水士の資格を持つ人を旅人に選んだことや、番組中の音楽が映像にあっていたこともあり、楽しみながら見ることができた。小さな魚が大きな魚に食べられないように群れになって回避しようとしている映像は確かにきれいだったが旅人が「パラダイス」と表現していたことには違和感を覚えた。水中ドローンの映像は、漁師ですら興奮していた様子もあってとても目を引き、興味深く感じられた。窪田等さんのナレーションは、美しい映像を引き立てており、非常によかった。

○　独特な地形で日本一深い駿河湾を満喫できる内容だった。ＣＧの落ち着いた色味にはこだわりが感じられ、これまで以上の完成度だったのではないか。また、４Ｋで撮影した駿河湾の美しい映像は、記録として残す価値もあると思う。行くことが難しい場所で見られる風景を紹介していたので、世界中の人々をも魅了でき、多くの人に幸せを与えられる番組になっていたと思う。また、紹介された場所の特徴をもっと知りたかったので、より丁寧に伝えれば、さらによくなったのではないか。最初、水中ドローンによる深海魚の映像を見た漁師のリアクションには驚いたが、映像の貴重さがとてもよく伝わってきて、よかったと思う。すばらしい風景の数々、深海魚が次々と釣れる様子など、奇跡的だと感じさせられるシーンが多かった。旅人の素直な言葉には心を打つものがあり、よい出演者だったと思う。

○　映像がきれいで、展開の切り替わりもよかったため、あっという間に見終えてしまった。深海魚の映像や日本一深い湾であることなどの情報も伝えており、駿河湾をとても興味深く感じられる内容になっていた。水中ドローンの映像は、それだけでもすごいと感じられたが、漁師が興奮している様子から、貴重な映像であることがさらに伝わり、とてもよい手法だったと思う。深海魚料理を並べた映像はあったが、どんな味、食感なのか気になったので、そこまで紹介してほしかった。釣った魚の値段を言っている場面があり、少し異質に感じられたものの、番組全体としては心が洗われる内容だった。

○　駿河湾周辺の山から深海へと徐々に進んでいく構成や、水中ドローンを使った映像など、さまざまな工夫が感じられる内容で、幅広い観点で駿河湾を知ることができる

貴重な機会となった。自然の伝え方、捉え方は人によってさまざまあると思うが、私にとっては、出演者の素直なリアクションを見ながら楽しむことができる番組だったと思っている。また、旅人のコメントは視聴者が共感できるよいコメントだったと思う。制作者の工夫や努力によって貴重な深海魚を撮影できたことも、番組に深みを与えていた。

○　日本で一番深い湾であることについて、二番目と比較するなどして、特徴をもっと伝えてほしかった。一番のすごさが分かると、今回の映像の貴重さをもっと感じることができるのではないか。番組全体にストーリー性があり、起承転結の構成になっていて分かりやすかった。旅人のコメントどおり、海中洞窟は秘密基地のようで、私も行ってみたいと感じた。旅人は、紹介されている場所のよさを引き立てており、とてもよい出演者だったと思う。ただ、弱肉強食の風景のあとで「パラダイス」と言っていたことには違和感があった。深海魚の料理を紹介していたが、それを食べる映像も必要だったのではないか。水中ドローンで撮影した深海魚の映像には驚いた。カメラだけでなく照明など、すごい技術だと感じた。

○　きれいな映像で、気持ちのよい番組だった。旅人の泳ぐ姿がとてもよく、語りと音楽も主張しすぎることがなく、美しい景色や深海魚の様子を引き立てていた。駿河湾のよさを、より引き立てられる人を旅人に選んだという作り手の思いは、視聴者に届いているのではないか。前半は静かに進行していたところ、漁師が出てきて一変したが、水中ドローンによる深海魚の映像に対する素直なことばやリアクションがとてもよかったと思う。そのおかげで、映像が貴重なこともいっそう感じられたので、とてもよい出演者だったと思う。

○　水中ドローンの操縦は難しいが、とてもうまく撮れていたと思う。ただ、映し出されている場所がどのあたりなのか気になったため、水深を表示したほうがよかったのではないか。一つ一つの話題はよかったが、こま切れでそれぞれが短すぎではないかと感じた。見終わったときの印象は、映像がきれいなことだけが残り、番組全体をとおして何を伝えたかったのか、深海が育む神秘の楽園がどこだったのかも分からなかった。駿河湾に多くの魚たちが集まる理由を解説していたが、その内容に違和感があった。過去の同シリーズでも指摘してきたが、科学的な解説が適切ではないと感じる場面があり、どのように調べているのか、今回も疑問が残った。

（ＮＨＫ側）

解説については、専門家への取材に基づいて制作した。幅広い視聴者に理解してもらうため、説明が分かりやすくなるように工夫した。その

際は、大事な要素が抜け落ちてしまわないように注意していたが、指摘を踏まえて、今後も視聴者により正しく伝えることを心がけていきたい。

○　専門家に確認した内容を、作り手がどのようにかみ砕いて表現するかはとても大切なことなので、これからも慎重に番組を制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

漁師のリアクションについては、深海魚の映像の貴重さを分かりやすく伝えられるのではないかと考え、あえてトーンを変える構成にして、メリハリのある内容にした。また、確かに自然番組では、料理という形での紹介はあまりしないと思うが、今回取り上げた地域では、深海魚を食べる文化があり、重要な資源でもあるので、あえて取り上げた。

＜放送番組一般について＞

○　９月２９日(月)のＮＨＫスペシャル「ＡＩでよみがえる美空ひばり」を見た。新しく作った楽曲をＡＩに歌わせるというアイデアは、斬新で壮大な試みだと思った。ただ、後援会の人が開発中の歌声を聞いて厳しい反応を示したのと同様、私も難しいだろうと批判的に見ていた。しかし、ＡＩによるコンサートは思わず涙してしまうほどの仕上がりで、感動させられた。ただ、故人であるため本人の了承を取れないが、勝手に歌声や映像を作ってもよいのかは気になった。この番組のように、技術を駆使して新しい分野を開拓することはＮＨＫの役割の一つであると思うので、これからも期待したい。

○　９月１９日(木)の「まるっと！みえ」でリポート「三重が“上手に縮む”ために」を見た。内容はよかったが、解説しているゲストの教授が手元の資料をクリップボードに挟んで、端を丸めてめくっていたため、分厚い資料を持っているように見えてしまい、気になった。制作者側で、もう少し配慮してもよかったのではないか。そのほか、報告している記者が棒読みだったのも残念だった。

○　９月２０日(金)のナビゲーション「ラグビーW杯　もう一つの闘い～勝利を呼びこむ新ジャージ～」を見た。とてもよい番組だったが、日本の初戦と同じ時間帯での放送だったのは残念だった。日本が活躍して盛り上がっているので、再度、放送してもよいのではないかと思った。

○　９月２１日(土)の有吉のお金発見　突撃！カネオくん「スゴい日本の技術！海底トンネルのお金事情」を見た。アクアラインの避難路や排煙の仕組みなど、なかなか見られない場所の映像も交えながら紹介しており、とても勉強になる番組だった。また、船の往来が激しく空港も近い場所なので、地下トンネルにしなければならなかったという事情も初めて知った。

○　９月２９日(日)の「ＮＨＫネイチャーコンサート」(総合 後1:05～1:48 中部ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。コンサート会場による臨場感は計り知れないが、音楽と共にテレビ画面にいっぱい映し出される映像効果は、テレビならではのよさであると思う。ジャンダルムへの過酷な登頂を人生に見立てた歌詞の曲が多く、中部ネイチャーシリーズを放送した後に、改めて放送してもよいのはないかと思った。

○　１０月２日(水)のガッテン！「長引く痛みの対策に革命！イキイキ生活への新たな道ＳＰ」を見た。対策として、痛みとどのようにつきあうかも重要であることを、一見無関係に思えるクリップボードを使って説明しており、おもしろい内容だったと思う。また、一緒に見ていた家族が「痛みのことばかり考えないで前向きに生きていきたい」と言っており、よい影響を与えられる番組だったと思う。

○　１０月４日(金)の金とく　中部ネイチャーシリーズ「穂高連峰・ジャンダルム～日本一険しい縦走路に挑む～」を見た。目が回りそうな風景や足場が狭く険しい場所を登る様子、悪天候のため３回目にしてようやく目的地にたどり着くなど、大変な撮影だったことがとてもよく伝わる番組だった。美しい風景だけでなく山の成り立ちなど、さまざまな解説があったので、とても勉強になった。番組の途中で上高地の美しい景色が紹介されており、とても落ち着ける映像だったので、メリハリのあるよい構成だったと思う。

○　金とく　中部ネイチャーシリーズ「穂高連峰・ジャンダルム」を見た。大変滑りやすい場所を登り、危険と隣り合わせの撮影に敬意を表したい。その分、迫力ある映像は衝撃的で印象深いものであった。また、とてもミステリアスでダイナミックな地形、風景の成り立ちが丁寧に解説されている点も勉強になった。

○　１０月１０日(木)の「あさイチ」で台風に備える風対策について取り上げていた。台風１９号の猛威への注意喚起報道がある中で、タイムリーな内容であり、すぐに窓に養生するなどを実践した。また台風通過後「たっぷり静岡」では静岡各地の被害情報を報じており、被災者に寄り添うきめ細かな情報を伝えていた。地域と共に生きる公共放送ＮＨＫとしてのあり方を痛感した。

○　１０月１１日(金)のドキュメント７２時間「北の大地　献血バスが行く」で、献血バスが道北の４町を回る様子を見た。献血に集まる人たちのコメントや様子がほのぼのとしており、３日間で１５７人が献血に訪れたことにも感心させられた。さらに、看護師の対応がとても優しく、自分も献血したいと思えたので、とてもよい番組だったと思う。集まった血液は別の車で運んでいることなど、裏側を知ることができたこともよかったが、少ししか取り上げられていなかったので、その部分をもっと盛り込めば、さらにおもしろい番組になったのではないか。

○　１０月１４日(月)のあの日　あのとき　あの番組 「皇居　知られざる世界」(総合後 1:20～2:30)を見た。即位礼正殿の儀を控え、昭和天皇の日常などを改めて放送したことは絶好のタイミングであり、公共放送の役割を果たしていると感じられる番組編成だった。また、以前放送した番組を活用した非常に効率的な構成になっていたと思う。このように放送できる良質な番組を持っていること、さらに、それを３５年もの間、色あせることなく保存していたことは、ＮＨＫの底力を感じさせ、すばらしいことだと思った。

○　１０月１５日(火)のクローズアップ現代＋「同時多発　河川氾濫の衝撃～緊急報告・台風１９号～」で、いち早く台風１９号による災害を科学的に検証する番組を放送しており、スピード感のある番組編成がすばらしいと思った。同時多発的な河川の氾濫は衝撃的な大災害と言えるものであり、考えさせられた。車が濁流に飲み込まれていく様子を乗っている人自身が撮影した映像や、堤防が決壊した河川数が 2000 年からの１０年間で年平均３河川だったのに対し、それ以降は年平均９河川に増えていることなど、番組で紹介されている内容は衝撃的な内容ばかりだった。それに対し、最後のまとめが「命を守るためには一人一人の備えが大切」という当たり前すぎるものだったので、もっと工夫してほしかった。今後も、日本の治水、土木、防災といったさまざまな観点から、科学的データも交えて分析し、検証結果を伝え続けてほしい。

○　１０月６日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「潜入“ＫＡＧＲＡ”望遠鏡　天文学革命はじまる！」を見た。ＫＡＧＲＡの内部のすごさや、非常に危険なレーザーが使われていることなど、多くのことが印象に残るよい番組だったと思う。また、重力波を観測するためにはレーザーのわずかなゆがみを検出する必要があることや、その発信源を正確に検知することで、素早く天体現象を観測し始められることなど、内容は難しいことが多かったものの、今後の天文学に関する話題が楽しみになる内容だった。ただ、ハイテンション過ぎた一部のナレーションや出演者が赤い服を着ていることは、番組の内容にふさわしいのか疑問に思った。

○　１０月９日(水)のガッテン！「サケ料理を激ウマに変えるたった１つの法則」はとてもおもしろい料理番組だと思ったが、料理を二つ紹介するなどしていたため、何が「たった１つ」だったのか、少し分かりづらい内容になっていたと思う。昔は漁船の上ですぐにサケを塩に漬けていたが、今は冷凍して運び、後から塩をふることも多いので、そのような話題にも触れると、より楽しい番組になったのではないか。

○　１０月１５日(火)のスピリチュアル・ジャパン「坐禅（ざぜん)」(ＢＳ１　後 1:00～1:25)で臨済宗と曹洞宗が紹介されていたが、それぞれの違いの説明もなく、雑な構成だと感じた。また、この番組は日本人向けなのか、日本に住む外国人向けなのか、コンセプトが分かりづらかった。

○　１０月１６日(水)の１００年インタビュー「山中伸弥が語るｉＰＳ細胞の未来」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:30)で、ｉＰＳ細胞で子どもを作れるほど科学技術が進む一方、倫理面の検討が進んでいないという話があった。これはとても大切なことなので、今後、その部分をクローズアップした番組を作るとよいのではないか。

○　福井放送局のホームページで、前回の番組審議会で紹介された「ニュースザウルスふくい」の中で放送している「幸福度日本一ふくいの謎」について見た。動画だけでなく画像付きの記事で読めることがよかった。同じように各放送局で地域情報を発信していると思うが、それぞれにアクセスするのは大変なので、１つに集約されていれば便利になり、もっと多くの人に見られるのではないか。

○　台風１９号による同時多発的な河川氾濫をしっかり報道できたのは、日頃から全国的に機材や人材を配置していたＮＨＫだからこそだと思う。都市と地方では堤防などにかけられるお金も違い、治水対策のレベルに違いが出ているのではないかと思う。今回の一連の報道は、そういった河川行政の課題も考えさせられる、災害の本質を捉えた内容だったと思う。

○　台風１９号による同時多発的な河川氾濫は都市部でも発生した。そのため、都市部に住む人たちも危機感を強めているのではないか。政治や経済の中心であり人口が集中している都市部で、今後、壊滅的な被害が発生した場合の対応など、都市部の人たちが抱え始めた危機感や不安感に応えられる番組も、別の機会に放送することなどは検討してもよいと思う。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０１９年９月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「２０１９年度後半期の国内放送番組」について説明があり、「２０２０年度の番組改定」についての意見交換を行った。

続いて、ナビゲーションスペシャル「あなたの命　どう守る？～南海トラフ巨大地震～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	稲村　修	（魚津水族館館長）
副委員長	東　　惠子	（東海大学名誉教授）
委　　員	井口　昭久	（愛知淑徳大学健康医療科学部教授）
	岡安　大助	（中日新聞社取締役）
	坂田　守史	（(株)デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
	玉井　博祜	（能楽師／玉井屋本舗社長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	松田　裕子	（三重大学副学長）

（主な発言）

＜「２０１９年度後半期の国内放送番組」および
「２０２０年度の番組改定」について＞

○　大河ドラマについて、「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」は、東京オリンピックに向けて放送していると思うが、今後も、歴史上の人物だけではなく、さまざまなテーマにも挑戦してほしい。

○　2020 年度から連続テレビ小説が月曜から金曜の放送になるようだが、そのほかの改定についても、働き方を踏まえて考えるとよいのではないか。

○　ＳＮＳなどインターネット上の声も番組改定に生かし、視聴者の声を広く反映してほしい。

○　放送局で制作する地域ドラマなど力を入れている番組は、全国だけでなく中部ブロックでも盛り上げてほしい。

○　オリンピックのように大勢の人が集まるときなど、災害対策や緊急時の対応が重要になってくる。ＮＨＫには公共メディアとしての役割を果たしていってほしい。

○　ドラマ１０「ミス・ジコチョー～天才・天ノ教授の調査ファイル～」に期待している。一般の刑事ドラマと違って、再発防止がテーマになるので、真の原因を究明し、二度と悲劇を起こさないという前向きな内容であるとよいのではないか。

○　出演者に高齢の方が多いような印象を受けるが、視聴傾向に影響はないか。改定を検討するにあたり、傾向を調査してはどうか。

○　「中部ネイチャーシリーズ」のような地域の特色を取り上げる番組は、これからも続けてほしい。

＜ナビゲーションスペシャル「あなたの命　どう守る？～南海トラフ巨大地震～」
（総合　８月３０日(金)放送）について＞

○　はじめなぜ百田夏菜子さんがゲストなのか疑問で、芸能人を出演させる必要があるのかとも思ったが、実体験を交えたよいコメントをしていた。スタジオセットがあたたかい雰囲気だったので、番組内容にふさわしいのかと気になった。オープニングや出演者などに、このテーマをとりあげた過去の番組と類似する部分もあり、演出をもっと工夫してほしかった。優良な事例を広く周知し、防災に対して共通認識を醸成する番組となっていたが、改善が必要ではないかと感じる部分もあった。ＣＧを駆使し、被害想定を分かりやすく説明していたが、地図をいくつも重ね合わせた演出は非常に見にくく分かりづらかった。「臨時情報」発表の基準や対応については非常に難解なため、もっと解説があるとよかった。避難所となる小学校で授業を継続するかどうかなど、新しい課題が顕在化していることも知ることができた。多岐にわたるテーマを取り上げていたため、初めにラインナップを紹介するなどすると見やすかったのではないか。

○　オープニングがやつぎばやで、散漫な印象を受けた。冒頭でラインナップを紹介するなどの工夫があれば、全体を通して伝えたいことが分かりやすくなったのではないか。非常に盛りだくさんの内容だが、一つ一つがとても重要なテーマなので、情報の軸足を整理したうえで内容を深めてほしかった。被害想定のＣＧは非常に臨場感が

あったが、紹介された災害対策の事例にはあまり緊迫感が感じられなかったので、防災意識を高める必要があると感じた。自ら身を守らなければならないという意識を、防災への関心が少ない人にも高めてもらえるような番組作りを期待したい。危険度が色分けされたハザードマップは、自分のこととして考えるきっかけとなる。さらに、被害状況に応じた具体的な対策が示されると、自らできることを考えられ、より有益な内容になるのではないかと思った。

○　多岐にわたる情報や取り組みを知ることができ、市民のひとり、町内の一員、企業人、そして家族の一員として何ができるのか考えるきっかけになった。社会のさまざまな関係や状況も踏まえ、当事者意識を持つことができて興味深かった。北陸地方は太平洋側ほど危機感が高くはないものの、大規模災害が発生した際、どのような広域的対策を打てるのか、具体的な取り組みが紹介されるとよかった。防災関連のホームページを番組内で紹介するなど、放送とインターネットの特性を生かして、コンテンツをうまく連動させていってほしい。

○　防災・減災においてＮＨＫが担う役割が大きく、今後も情報発信に期待したい。中部地方でも津波の被害が大きくなることから緊張感を持って番組を見たが、地域ごとに状況は異なるため、地域ごとの取り組みを詳しく取り上げた番組もあれば、防災・減災にさらに役立つのではないか。オープニング映像は既視感もあったが非常に分かりやすく、緊迫感のある演出だった。事例紹介では、私たち一人一人が地震に向き合い命を守るのだという思いが伝わってくるなど、防災意識を啓発する内容となっていてよかった。ゲストの百田さんは浜松市出身で、実体験を交えて取り組みを紹介しており適任だった。地震をただ恐れるのでなく、リーダーシップを取ることが大事であると名古屋大学減災連携研究センター長の福和伸夫教授の説明があり、目を背けるのではなく、守る意識を持って積極的に向かい合うことを示唆する番組になっていた。命を守り、社会の機能を維持するための取り組みや備えが大事であることを改めて痛感した。

（ＮＨＫ側）

金曜午後７時３０分からの放送だったので、幅広い世代に見てもらえるような番組を目指した。若いながらも防災に関心があるということで、百田さんに出演してもらった。今後も、テーマに関心を持つ若い人に出演してもらうなど、幅広く見てもらえるような番組作りを積極的に進めていきたい。

○　防災・減災についてＮＨＫの役割は非常に大きく、防災の日を前に放送することは非常によい。もともと東海地震の対策は予知を前提とした防災計画が組まれていたため、予知なく巨大な地震が起きる可能性があることも伝えてほしかった。各地域の取り組みを伝えるのは非常によいことだが、津波の来ない内陸部ではどのような被害が想定されるのかがあまり描かれておらず、そういった地域の人たちにとっては、ひと事と感じられてしまう内容になっていたのではないか。被害者を減らすための対策に十分取り組めているのかを検証するなど、「あなたの命どう守る」ということを追求し、内陸部や北陸の住人にも伝わる番組にしてほしかった。若い人たちに興味を持ってもらうという面で、百田さんは非常によかったが、生放送のよさが出ていたかは疑問であり、演出にもっと工夫が必要だったのではないか。

○　福和さんが「見たくないことも見て、皆で同じ船に乗っていることが重要である」と説明していたが、実際に体験しないとわが事とはならない。災害対策の重要性を知ることができたが、自身の住む地域や仕事場に地震が直撃することが分かっても、どこかひと事のように感じた。福和さんのことばには含蓄があり、難しい内容でも興味をひくよう工夫して伝えていることは感じられたが、ゲストが番組イメージとかけ離れていることなどもあり、最後まで興味を持って見ることができなかった。大きな被害には至らない災害が頻繁に起きており慣れてしまったのかもしれないが、それを払拭していくことが需要であり、防災・減災につながる報道を続けなければならない。

○　大きな被害があるかもしれないと恐怖を感じていたが、私の住む地域には被害がない想定だったため、番組を見てほっとする部分があった。保育園児の避難訓練やハザードマーカーなどのよい取り組みが紹介されていたが、そのうち、要支援者の避難などは、もっと緻密に対策を進めなくてはならないと感じた。インフラが機能していない状況下で地域住民や企業が連携して取り組む対策は、すべての地域で実現できることではなく、珍しいケースだと感じた。

○　若い出演者が南海トラフについて真剣に考えていることが印象的だった。また、街に津波が押し寄せる想定の映像はとても恐ろしく感じられて、日頃から南海トラフについて考えることの重要性を認識させられるよい番組だった。

○　南海トラフ巨大地震や津波によって想定される被害について分かりやすく伝えられており、ひと事ではなく当事者として理解を深められる番組だと感じた。また、企業の連携や地域の取り組みが視聴者目線でまとめられており、自分たちのこととして捉えられるように分かりやすく作られていたと思う。地震や津波のイメージ映像は見たことがあるように感じて少々気になったので、ほかの映像を使うほうがよかったのではないかと感じた。

○　情報が多く、番組全体のつながりが見えなかった。北陸でも震度５をこえる地域があることには驚いた。一人一人が防災意識を持つことの重要性を述べていたが、家具の固定や家の耐震化など、身の回りの具体策を中心に取り上げたほうがよかったのではないか。番組を見て、誰が何をするのか、何をしたのかも重要なので、放送後、どのように変わったのかも、ぜひ取り上げていってほしい。

（ＮＨＫ側）

関心の方向がそれぞれの立場や住んでいる地域で異なることを意識し、発信し続けなければいけないと強く思った。番組制作を進めていく中で、制作者自身、防災への思いが至っていないことを実感することもあった。何か行動を起こさなければならない、備えなければならないと思ってもらえるように、引き続き取り組んでいきたい。

＜放送番組一般について＞

○　７月２７日(土)のＮＨＫスペシャル「半グレ　反社会勢力の実像」を見た。半グレ当事者の密着取材やインタビューによりリアルな実態を伝える内容であった。なかなか明らかにならない実情を知ることができる内容であった。視聴者がその現状をを把握することにより、危機管理意識をもち、犯罪の抑止、防止につながる番組であったと思う。

○　８月４日(日)のＮＨＫスペシャル選「完全解剖　ティラノサウルス～最強恐竜　進化の謎～」を見た。ティラノサウルスの進化について、新たな化石の発見や最先端の科学技術による分析結果、研究者の話など、大変見応えのある番組だった。特に、ティラノサウルスのＣＧはとてもよくできていたと思うが、体色や声は化石からは分からないという認識だったので、どうやって明らかになったのか、もしくは想像によるものなのか、少し気になった。紹介されている内容が仮説の一つなのかどうか、もう少し分かりやすく伝えたほうがよいのではないかと感じた。

○　８月１２日(月)のＮＨＫスペシャル「かくて“自由”は死せり～ある新聞と戦争への道～」(総合 後 10:00～10:49)を見た。日本新聞を題材にして、いかにして戦争へと突き進んだのかを映像化しており、その経過などがとてもよくまとめられていた。メディアがいかに重要な役割を担っていたのか、綿密な取材による緻密な構成になっていたと思う。また、当時の音楽教師の活動や日本の政治動向も織り交ぜて分かりやすく構成されており、すぐれた番組だと感じた。

○　８月１７日(土)のＮＨＫスペシャル「昭和天皇は何を語ったのか～初公開・秘録“拝謁（はいえつ）記”～」(総合 後 9:00～9:59)を見た。昭和天皇が戦争への反省を言及しようとしたことに対し、吉田首相の要望で削除されていったことなど、さまざまな事柄の経緯がドラマ仕立てに再現されており、昭和天皇の人間性が伝わる内容だった。昭和天皇の映像がうまく盛り込まれており、また、番組全体を通しても政治的中立性をしっかりと保った、分かりやすくてよい番組だったと思う。

○　７月２５日(木)の「ニュースザウルスふくい」を見た。福井県が幸福度日本一であることに対し、実感がないという県民の声が紹介されていた。日本一のＰＲだけでなく、幸福実感度を高めることも重要だと思うので、それに向けた具体的な取り組みも紹介してほしい。

○　７月２９日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で用水路事故についての報告を見た。警察や消防に事故件数の統計データがない中で、独自調査によって多くの事故が発生していることが分かったと伝えており、ＮＨＫの取材力の高さを感じた。また、事故の起こる原因とその対策に焦点を当てており、短く分かりやすく伝えられていた。

○　８月２５日(金)の小さな旅「イルカと棲（す）む島～石川県　能登島～」を見た。能登島にイルカがすんでいるだけでなく、一緒に泳ぐ体験プログラムがあることに驚き、私も体験したいと思わせてくれる番組だった。また、紹介されていた民宿の若大将やイルカガイドについて、その考え方やことばにとても共感できた。

○　８月２８日(水)のクローズアップ現代＋「知られざる天才“ギフテッド”の素顔」を見た。「ギフテッド」ということばを聞いたことがなかったので目に留まった。孤独感があったことや不登校になったことなど、ギフテッドの実態を知ることができた。外国で実施されているギフテッドへの進んだ教育が紹介されており、日本でも社会全体で育てていかなくてはならないことを啓発する番組だった。

○　８月３１日(土)の「証言記録　ＴＶ　ｖｓ．　伊勢湾台風」(総合 前 11:25～11:50 東海３県ブロック)を見た。被災地のひどい状況や被災者からの厳しいことばなどもあって、当時取材していた人たちが抱いていた葛藤、苦しみながらも必死に伝えようとしていたことがよく分かる番組だった。ただ、組織の判断で取材に参加できなかった旨の証言は、必要だったのか疑問に感じた。また、なぜ伊勢湾台風６０年を当時の取材者の証言で伝えるという切り口の番組を放送したのか、考えを確認したい。

（ＮＨＫ側）

災害現場での取材については、被災者や視聴者がどう思い、何を求めるのか、また、取材者はどうすべきなのか。伊勢湾台風があった６０年前も今現在も絶えず考えていかなくてはならないテーマであると思い、このような切り口の番組を放送した。

○　９月６日(金)の「まるっと！みえ」を見た。伊勢湾台風６０年として木曽岬町の広域避難の取り組みを紹介していたが、計画の進行状況や連携自治体の声、防災訓練参加者の反応、今後の課題、町民の賛成意見と反対意見など、短い時間で情報の過不足がなく、分かりやすい構成になっていたと思う。

○　９月１１日(水)の「まるっと！みえ」を見た。南伊勢町の海産物で地域を元気にする取り組みを紹介していたが、よい側面ばかり紹介されていたように感じた。課題となる要素も同様に紹介したほうが中立的で、よかったのではないかと思う。

○　どちらも津放送局のホームページで動画が配信されており、いつでも見られるのはよいことだと思う。リアルタイムで視聴できない人も多いと思うので、貴重な地域情報を視聴できる機会がもっと増えるとよいのではないか。

○　９月１３日(金)のナビゲーション「感染が止まらない～豚コレラ発生１年～」を見た。放送当日に山梨や埼玉での感染が確認されたが、そのことを番組内にうまく盛り込んでおり、対応の早さがすばらしいと感じた。ワクチンについても紹介されていたが、これだけ長期化しており、なぜワクチンが打てないのか疑問に思う人も多いと思うので、打つことによる長所や短所などをもっと深掘りし、丁寧に伝えてほしかった。

○　９月１３日(金)の静岡スペシャル「熱くなれ静岡！ラグビーワールドカップ２０１９」を見た。出演者による大会の見どころなどの熱いトークとともにラクビーファンが集う飲食店を取材したアナウンサーもＷａｒ　Ｃｒｙなどにより一緒に盛り上がり、ラクビーの魅力が楽しく伝わる内容であった。ワールドカップに向けて、ラクビーの関心が高められる番組であった。

○　９月１５日(日)のダーウィンが来た！「ハチドリ怪事件　消えた卵とタカの正体」を見た。１秒間に８０回羽ばたくことができるハチドリを鮮やかな映像とすばらしいカメラワークで撮影しており、また、ストーリーも分かりやすく、楽しく見ることができる番組だった。

○　９月１６日(月)のひとモノガタリ「“がんになって良かった”と言いたい～京大生のＳＮＳ闘病記～」(総合 後 6:05～6:39)を見た。「がんになって良かった」というタイトルが印象的だった。食べること、歩くことといった日常の大切さを考えるきっかけをくれる番組だった。また、私も闘病時にメールやＳＮＳで励まされた経験を持っており、共感や希望を与えられる内容だった。

○　９月１６日(月)のあなたも絶対行きたくなる！日本「最強の城」スペシャル「第４弾」(総合 後 9:00～9:59)を見た。城の詳細な情報だけでなく、撮影スポットなども紹介されており、幅広い人たちが楽しめる番組だったと思う。また、現存最古の天守閣を売りにしていた丸岡城について、そこまで古くはなかったという調査結果が紹介されていた。地元としては残念な話題に思えたが、前向きな視点で伝えられており、新たな魅力の発見とも感じられる内容だったので、とてもよかった。

○　９月１日(日)のサイエンスＺＥＲＯ「新事実続々 解明が進む“活断層地震”の謎」を見た。熊本地震で３秒程度の周期の揺れが発生し、それによって超高層建物で共振が起こったとあったが、戸建ての被害も多い地震だったので、少し理解しづらく感じた。ただ、地震のメカニズムはまだ分かっていないことも多いので、データを積み上げて仮説、検証をし、一つ一つ明らかにしていくことが重要であり、とても興味深い内容だった。

○　７月３０日(火)の真央が行く！「岐阜編～競泳＆ゴールボール～」(ＢＳ１ 後 9:00～9:49)を見た。浅田真央さんが選手と一緒になって競技を体験しながら取材する姿がよかった。ゴールボールの競技の楽しさも、とてもよく分かる内容だった。また、競技中の様子だけでなく、家庭での姿も紹介されており、とてもすばらしい選手たちであることが伝わる番組だった。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０１９年７月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、越中とやまスペシャル「身近な危険　どう防ぐか～用水路事故　総力取材～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	稲村　修	（魚津水族館館長）
副委員長	東　　惠子	（東海大学名誉教授）
委　　員	井口　昭久	（愛知淑徳大学健康医療科学部教授）
	岡安　大助	（中日新聞社取締役）
	坂田　守史	（(株）デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
	玉井　博祜	（能楽師／玉井屋本舗社長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	徳田　八十吉	（徳田八十吉陶房代表）
	松田　裕子	（三重大学副学長）

（主な発言）

＜越中とやまスペシャル「身近な危険　どう防ぐか～用水路事故　総力取材～」
６月２１日放送について＞

○　地域に向き合った番組で、家族３人を用水路事故で亡くされた方の話もあるなど、富山県においてものすごく深刻なテーマだということが理解できた。番組内容はとてもよかったが、記者が棒読みだったのが気になった。専門的な解説や現場の状況など一生懸命伝えていた点はよかったが、一定の速度で台本を読んでいるだけのように感じた。視聴者が聞きやすい自然な話し方を、もう少し練習すると印象も変わると思う。目線もずっと同じ方向だったが、カメラの方を時折向くなど、メリハリをつけると見やすくなったのではないか。もちろん原稿の中身も大事だが、上手に読むことができると、聞きやすく伝わるようになると思う。

○　記者のコメントが終盤は早口になり、すごく気になった。深刻な内容のため、切迫感を表わしたいと思っていたのかもしれないが、聞き取りにくく、理解できない部分もあった。散居村がとても絵になる風景だったが、想像をこえる長さの用水路が危険

な状態のまま放置されているとのことだった。３人のご家族を亡くされた方の嘆きには、もっと伝えたいことがあったのではないかと思わされた。３人の方が亡くなられた場所はどういう特徴のあるのか、どのような状態で用水路に落ちたのかに全く触れていなかったが、そこに触れると、対策として何が必要だったのかわかりやすかったのではないか。用水路事故のけが人の数について、警察や消防では把握しているが県では何も把握していないということが衝撃的だった。富山県では農業に携わる方が多いだろうが、宅地の用水路についてなども、ＮＨＫできめ細かく調べてくれるとありがたい。

○　問題提起から背景のあぶり出し、要点のまとめという構成で、富山県の現状を語り、他地域の先進事例から、行政と地域住民の取り組みまで紹介されていて、非常に真面目な構成だと感じた。アナウンサーと記者のやり取りのぎこちなさが気になって、内容が入ってこなかった。視聴者に訴えなくてはいけないことが多い内容だが、表現の問題であまり伝わらないのは残念なことだと思う。用水路の事故に対する問題意識を持ち、課題を広く伝えることを目的にした番組だと思うが、用水路の多面的な機能を考えると、事故だけを捉えてよしあしを判断するのは難しいテーマだと思う。一つの安全を確保しようすると、もう一つの事故が起きるということもあり得る。また、高齢者が多く出てきたが、子どもにとって用水路はどういうものなのか、どんな危険性があるのか。多くの人に共感をもって見てもらうには、さまざまな世代の方に取材した方がよかったのではないか。この地域特有の散居村の風景は、用水路の部分に柵を建てることで、そのよさが損なわれるという可能性もある。趣旨は分かるが、危険性の問題だけではなく、もう少し多面的に用水路を掘り下げることで、訴えたいことをより多くの人に広められたのではないか。

○　富山の用水路問題を初めて知った。若い記者が問題を見つけ出し、一生懸命取材して１本の番組に仕上げた熱意はすごく伝わってきた。だが、記者の話し方があまりにも素人っぽく、番組で放送するのであれば、鍛錬が必要だと思った。死亡事故の多さの理由として、浅くて狭いこと、流れが速いことはよく分かったが、なぜこれほど多くの人が落ちてしまうのかという疑問が最後まで解消されなかった。さまざまな状況で落ちたという事例があったが、状況別の分類や割合が全く分からなかった。住民が対策に取り組むことは非常によいことだと思う。だが、明かりをつけるという対策は、「暗くて落ちた」という事例が紹介されていなかったため、唐突で納得感がなかった。先進事例の紹介はあったが、総力取材というのであれば、消防のデータで 187 件あった現場を当たり、岡山市の取り組みのようになぜここで落ちたのかをＮＨＫで分析し、危険な場所を点数化するなど、転落する要素の分類、具体的な対策までつながる提言がほしかった。行政や住民の動き、取り組みの紹介は大切なことだと思うが、それが

不十分だからこそ番組を作ったのであれば、対策としてやるべきではないかというところまで踏み込んだ番組にしてもらえるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

番組では現場を取材している記者本人が伝えるべきと考えて出演させた。今後は読み方の練習もしっかりしていきたい。事故のほとんどは高齢者であるが、確かに子どもが亡くなっている事例もある。ニュースや報道の企画の中で伝えてはいるが、この番組でも子どもの情報も入れるべきだったかもしれない。用水路事故の非常に難しいところは、実際に怪我をした人たちに伺っても、なぜ落ちたのか分からないと言う方がほとんどで、さまざまなケースがある。指摘のように岡山市のように点数化するなど、事故が起きている所はどこなのか調査・分析していくというアプローチは必要で、富山放送局では「用水路事故をなくす」キャンペーンを続けている。今後もＮＨＫから積極的に対策も提言していきたいと思う。

○　2017 年に放送したナビゲーション「身近に潜む危険用水路」で同じような内容が放送されていたが、身近に潜む高齢者の転倒の恐ろしさを、用水路事故という面から報道した優れた番組であった。今回の大筋は前回とほとんど変わっておらず、なぜ身近な浅い用水路で人が亡くなるのかという疑問とその答えにも新しい発見はなかった。ただ、富山県では用水路の事故が全国で最も多く、３年連続であるという事実については前回にはない情報だった。富山がなぜ突出して多いかという理由に注目していたが、富山県は全国に先駆け、不規則で曲がっていた用水路をコンクリートにしたため流れが速くなったとのことだった。また、農業離れが進み、農村で用水路の危険性の認識が薄まってきたとも言っていたが、どこでも同じではないか。富山の特徴は、多くの住宅が用水路に囲まれていることなのではないかと思った。前回の番組とどこが違い、この３年間で何が変わったのか、言及すべきだった。記者の解説は初々しく新鮮だった。

○　そもそもなぜ用水路に近づかなくてはならなかったか疑問をもった。岡山や岐阜を取材し、きめ細かだと思ったが、用水路にわざわざ近づき、昼間であればなぜ急に落ちたのか、夜であればなぜ１人で行くのか、素朴な疑問に答えてほしかった。事故にあった方の年齢や子どもの割合などを知りたかった。記者が最後に話していたように、何か危険なことが起こるかもしれないというふうに常に考えることが、夜になったらなるべく１人で近づかないなど、自らの意識を変えることにつながるだろう。お金をかけずとも回覧板などの地域の取り組みを推進し、亡くなった場所や時間、危ない地

域について情報共有できる方法を提案してもらえると、取り組みやすく、対策の一歩になるのではないかと考えた。

○　導入部分に３人の家族を亡くされた方が出ていた。非常に衝撃的で、問題への関心を引く作りとなっていた。記者とアナウンサーの掛け合いについては気になった。狭くて小さい用水路でなぜ亡くなるのかということは、人形を使って説明していて、非常にわかりやすかった。なぜなのか推理するように、自分で考えながら最後まで関心をもって見ることができた。統計によると富山では用水路事故で亡くなっている人が３年連続日本で最も多い、ということだったが、４年前はどうだったのか気になった。富山がどこかで逆転したのであれば、事故を減らした県があり、他県は非常に優れた取り組みをやっていると考えられるため、もう少し掘り下げたほうがよかったのではないか。圃場整備は日本中どこでも取り組んでいて、用水路のコンクリートブロック化は当たり前で、これが理由だというのには無理があると思った。岡山の事例も出てきたが、どうして岡山を取り上げたのか説明がなく、新潟県の資料も紹介されていたが、新潟はどんな取り組みをしたのか気になった。消防、警察、県の取り組みや、自治会で看板を作るなどの取り組みもあったが、本来は市町村が真っ先に取り組まなくてはいけないのではないかと思った。市町村の取り組みに全く触れてなかったが調べてほしいと思う。

○　日常生活の中で起きる危険に対する問題提起、さまざまな取り組みの紹介、行政の動きや実験の結果など、専門的な知見を得ることができた。また、研究会を通じ異業種が集まり、側溝や蓋を作る取り組みなど、用水路から県民を守り、安全性を高めるために丁寧に作られていた。番組冒頭の自宅の近くで家族３人を亡くされた方が出演していたが、どのような思いで出演されたのかと想像すると、胸が痛かった。構成については、図表やグラフ、キャプションなど、明確でわかりやすく整理されていて、見やすかった。毛細血管のような用水路地図、古い地図と土地改良区を対比した地図は興味深かった。だが、なぜ蓋をしないのだろう、暗きょにしないのだろうと思った。農地から宅地に変わるなど土地利用が変わってきているため、もっと根本的に工夫ができるのではないかと思った。岡山や新潟の先進事例である危険指数などを参考にしながら、番組をきっかけにして、全国の同じ課題を持つ地域間ネットワークによって課題解決の糸口を提起していくような、そういった取り組みができるのではないかと思った。この番組は安全性を高める作りになっていたため、学校や町内会など関係機関の教材としても有効なのではないかとも思った。

○　全国に比べて著しく多い死亡者数に注目し、番組化したことは、以前から高く評価している。用水路の死亡者だけでなく、けが人も含めた事例を扱っていたのは良かっ

た。ただ、他県の先進事例紹介もあったが、富山県ではあまり効果はないと感じた。農業用水路だけでなく、排水路もあり、流雪溝、工業用水もある。なぜそこに水路があるのか、その理由や経緯、変遷などをもっと掘り下げて、対応策を探ってほしい。都市計画の中でもともとあった農業用水路が、いつの間にか、家を作ると排水路として整備されてきたという経緯などもある。地元の人は用水路があることは普通のことで、大きな問題として捉えていないという声があった。しかし、用水路の問題は、自然を利用して共生するとはどういうことなのか、産業と人の暮らしの関係、土地利用へのお金のかけ方といったさまざまな観点から考えていくべきではないか。用水路事故の責任の所在や、用水路の受益者と被害者の関係は難しい問題で、もっと掘り下げないと分からないかもしれない。一方、対策につなげていくためには、さまざまな事故死の中で用水路事故がどういう位置づけにあるのかを見なくてはいけないと思った。

○　事故の件数は富山県で突出しており、放送範囲も富山県域ではあるが、視聴者にとってもう少し普遍性のあるものとして投げかけたほうがよかったのでないか。安全というのは、防災に限らず、交通安全や現場の作業安全など、日常的にさまざまな活動に関わるが、起きることやそのメカニズムを正しく認識することに始まり、それが各自の意識や感性にどう根付くかということが大事だ。意識は風化しやすいため、しつこく伝えると同時にマンネリとの戦いが必要だ。メカニズムの理解については、大した流れでない水路に体がはまった時のせき止め効果を知り勉強になった。しつこく伝えるという部分は、できるだけ多くの人に切り口を変えながら、定期的に見てもらえるのが望ましいと思う。そう考えると行政の課題にまで踏み込んだ構成は少々盛りだくさん過ぎるように感じた。

（ＮＨＫ側）

前回放送した後も事故が無くならないということを重く見て、今回のキャンペーンと番組化を決めた。対策に重きを置くことを決め、危険性を意識していないということが、事故が起きる大きな理由であると考えた。減らしていくためには放送を通じて何度も繰り返し訴えていくしかないと考えている。市町村がなぜ対策をやらないかという点は、管理者が誰かということが難しく、市町村の役割はどこまでで、税金をどこまで投入するべきなのかということを、考えていく必要がある。蓋の設置についても、農家の方から設置しないでくれという意見は多くあり、清掃が大変になるということが一番大きい。岡山では本当に危険な個所、事故が繰り返されている場所に絞り対策している。本当に危険なところを抽出する取り組みは、今後必要だと思う。また、富山だけがなぜ多いのかについては、高低差が大きいことで流れが速くなるとい

う要因が挙げられるが、一方で普遍的な原因を考えることも必要である。現在、ＮＨＫでは全国調査を進めており、今後もキャンペーンや番組で広く伝えていく予定である。

＜放送番組一般について＞

○　６月１８日(火)のイッピン「薄くて丈夫　伝統の技～岐阜　美濃和紙～」を見た。紹介されていた美濃和紙あかりアート展は非常に情緒のある、世界から注目されるよいイベントだと思う。美濃市にランプシェードの専門店があることを初めて知った。手すきの紙がどのように作られているか想像すると、紙をすいている姿しか思い浮かばないが、今回は全体の工程が一つ一つ紹介されていて、原料からどのように紙になっていくのか初めて知ることができた。レースのような編み目の美濃和紙も初めて知ったが、とても丁寧に作られていて、「イッピン」の価値があると思った。職人に若い方がおり、伝統が引き継がれていると分かりうれしかった。さまざまな工程があり、大変な手間をかけていることがしっかり伝わってきた。水うちわの復活にはさまざまないきさつがある。美濃和紙をテーマとした番組であるため許容すべきとも思うが、今回の取り上げ方がよかったのか気になった。こうぞ紙とがんぴ紙のすき方の違いも紹介され、とても勉強になった。

○　６月２１日(金)の静岡スペシャル「ある水筒の物語～平和の祈り　静岡から世界へ～」を見た。都市化が進む中で、静岡空襲が風化してしまっていると思う。それぞれの立場の方が参加するオペラを通じて、戦争の悲惨さや平和の尊さを、静岡だけでなく広く伝える。この番組が平和をつないでいく語り部のように、輪を広げる機会になったのではないか。

○　６月２４日(月)の逆転人生「逆転の日本酒　世界に羽ばたく」を見た。取り上げられていた日本酒の製法については賛否両論があり、番組でどう扱うのか興味があった。どちらがよいというわけではないが、１つの考え方を淡々と紹介しているだけで、物足りないと感じた。バックグラウンドの静かに流れる音楽は気が利いていてよかった。

○　６月２８日(金)のあしたも晴れ！人生レシピ「ライフチェンジ～新たに見つけた夢をかなえる～」を見た。地域の魅力を感じて都会から移住し、さまざまな人を地域に呼び寄せてくれる。まれなケースかもしれないが、これからそういう時代になっていくとよい。地球の裏側からも人が来る時代。地域を大切にして、魅力をアピールしていく人が１人でも増えるとともに、後継者を育てるお手伝いをしていきたいと思った。

○　６月３０日(日)の目撃！にっぽん「ざざむし～信州・伊那谷に生きる～」を見た。伝統的な昆虫食文化が、川漁師の高齢化と後継者不足で風前のともし火になっている状況を、地域住民を含めて、さまざまな映像を駆使して紹介しており、楽しく見た。一番心に残ったのは、最高齢の川漁師の姿と言葉だ。川の漁から上がった漁師は四方に向かって、与えられた恵みに感謝する言葉を口にしながら、深々と頭を下げる。川での漁をすることでざざむしの生息環境がよくなることを経験的に知っており、人と自然が相互に恩恵を受ける、伝統的な営みであることを語っていた。このような日本の伝統的な自然観は、とても貴重だと思う。今、ちまたでは難しい言葉で語られることが多いが、持続可能な人と自然の関わり方として、ぜひ広く発信してほしい、すばらしい番組だと思った。

○　６月３０日(日)のゆる山へＧＯ！スペシャル　２０１９春(総合 前8:25～8:51 中部ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。ゆる山という言葉を初めて聞き、言い得て妙と感じたが、どのような意味でゆる山と言っているのか気になった。低い山、簡単に行ける山という意味かもしれないが、高峰に比べ登山道の整備は遅れていて、道しるべも少ない。登山者が少ない低い山のほうが危険なケースも多い。日帰りが可能で軽装で出かけられるというイメージばかりが先行することはよくない。ゆる山という言葉が適切だったのか気になった。あまり触れられていなかったが、最寄り駅や駐車場の有無、危険個所があるのかなどの情報をしっかり教えていただけるとよい番組になるだろう。カタクリの群落が取り上げられていて非常に嬉しかったが、番組で紹介することで、かえって自然が荒れるというようなことがあるかもしれないと懸念した。

○　６月３０日(日)のＮＨＫスペシャル「誰があなたの命を守るのか“温暖化型豪雨”の衝撃」を見た。西日本豪雨から１年たつタイミングで、温暖化型豪雨という言葉が初めて使われた災害であることに興味をもった。西日本豪雨から１年がたち、岡山や広島の豪雨時のデータ分析がしっかりされていた。長期的な雨により広範囲な地域で浸水や氾濫がもたらされることを、気象庁やＮＨＫ独自のデータを使って示していて秀逸だった。降水量と川の水位がどのくらい変化をしているのか動的データで見せていた。自分自身で命を守らないといけないなかで、番組で示されていたタイムラインと動的データは､個人が避難を判断する際の危機意識に大きな影響を与えると思った。気象庁や行政と協力し、動的データで見せられるシステムを構築できれば、いろいろな場面で展開できるのではないか｡ＮＨＫの報道の力､データ分析の力はすごいと思った。また、ＮＨＫオンデマンドで､「防災」や「災害」で番組を検索したところ、関連するキーワードの紐付けがなされていないのか、番組タイトル名でしかヒットせず、不便だと感じた。

○　７月７日(日)の目撃！にっぽん選「“ポンコツになった母だけど”～タクシードライバー歌人の日々～」を見た。母親が認知症になったことが受け止められないが、歌にすることによって何とか受け入れているという話であった。老いゆく母親とわずかな日常の中に楽しみを見出す、一生懸命生きているのだということがすごく伝わってきた。私自身も自分と母親のことを振り返る機会となった非常によい番組で、終わり方も美しく、大変勇気づけられた。人を取り上げた優れたドキュメンタリーで、今回の演出はよいと思うが、高山さんの日常はこれからも続いていくのだなとつらく感じるとともに、施設や行政のフォローについても少しでも触れられていると、同じような立場で頑張っている人の参考になり、勇気づけられるものになったのではないか。

○　７月７日(日)のダーウィンが来た！「発見続々！日本は恐竜王国だった」を見た。日本が恐竜王国であったことが明かされるなど、大変わくわくする番組だった。世界最大級の恐竜が発見されるまで７年間倉庫にしまわれていたという物語や、生態の解明が進み恐竜の生きている時代をＣＧで再現していたことが、とても興味深かかった。先の読めない現代社会の中にいながら、ロマンを感じられる番組で、イマジネーション豊かな子どもたちの夢を広げるものだった。また、恐竜の世界をＣＧ化できたのは、多くの人々の協力と努力によるものだというエンディングもよかったと思う。

○　７月７日(日)のＮＨＫスペシャル　恐竜超世界　第１集　「見えてきた！ホントの恐竜」を見た。恐竜の様子が鮮明にＣＧ化されていて、恐竜世界にタイムスリップできる番組だった。世界から化石を集め恐竜の姿を明らかにするなど、研究者のさまざまな視点や興味を、大変おもしろく見せてくれた。専門性に特化した番組制作は、ＮＨＫならではだと思う。

○　７月９日(火)のかがのとイブニング「社会の問題点を考える旅～ダークツーリズム」というリポートを見た。アウシュビッツや９・１１など、世界には悲劇の記憶がある。ハーバード大学のアンドルー・ゴードン教授が、人間はとても複雑で、レジャーや娯楽だけでなく、学ぶ意味のあることを体験することも観光の１つだと言っていた。嫌な思い出の蓋を開けられたように感じたが、えぐられるような感情に向き合うことは、自分自身の仕事にも通じるのではないかと思った。広島のことも述べられていたが、大変考えさせられた。日本はダークツーリズムの考え方が遅れていると言われているが、これから金沢でももっと掘り下げて考えられていくのではないか。

○　７月１０日(水)のガッテン！「急増中！風疹＆帯状ほう疹　徹底対策ＳＰ」を見た。風疹とはしかは同じかと聞かれて、出演者全員が同じであると答えていることか

ら分かるように、感染症に対する知識が失われている。風疹ワクチンが女子だけに打たれて、男子には打たれてこなかったことはあまり知られておらず、いま慌ててワクチンを打とうとしているが、その経緯や事情をわかりやすく説明していた。ワクチン接種の啓発として、非常によかった。

○　７月１１日(木)のかがのとイブニング「学校統廃合の波に対する存続の取り組み」という記者リポートを見た。校区外から通っている生徒がいることを初めて知った。学生時代の絆や田舎での暮らしを大切にして、地域をいったん離れても、また地域を大切にしたくなる時代が来るとよいと思った。

○　７月１３日(土)のＮＨＫスペシャル「夢をつかみにきたけれど　ルポ・外国人労働者１５０万人時代」を見た。ここ２年で２０～３０代を中心に５５人が亡くなったのは、大変なことだと思った。今もあまり変わらないかもしれないが、使用者側のコンプライアンス意識は非常に乏しく、内職といって残業させる、実習先の変更もできないなど、労働条件は非常に苛酷である。番組で取り上げられた青年たちは非常に孤独感にあふれていた。「日本はひどい国」という言葉がでるなど、外国人労働者を消耗品や歯車のように扱っていると感じた。こんな日本でよいのかと思わざるをえず、非常に残念だったが、これが現実なのだと思った。訪日のために借金をしている人たちが出ていたが、結果的には借金が彼らに無理をさせる原因となっている。この借金について特集で取りあげるとよいと思う。

○　７月１４日(日)の「これで分かった！世界のいま」を見た。見る前に思っていた内容とは全く異なり、子ども向けなのではないかと思った。子どもが国際ニュースに関心を持つきっかけとしてはよいと思うが、大人が見識を深め、さまざまな視点を得るための番組ではないと感じた。ロンドンやニューヨークと中継をつなぎ、特派員が解説するところはさすがＮＨＫと感じたが、現地の最新情報や初めて聞くような内容が紹介されておらず、少し残念だった。イギリスの選挙について、バラエティーのような演出で、子どもでも興味が湧くような内容になっていたが、子ども向けのあとにもう少し深掘りした話があれば、理解も進み、よかったのではないか。出演者の人選も疑問で、子ども向けであれば子どもが出演した方がコンセプトもはっきりするし、大人向けであれば適した人選が必要だと思う。３つのテーマを取り上げる構成だったが、最初のテーマぐらいは深掘りをしてもらいたい。テーマは２つくらいに絞ったほうがよいのではないか。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０１９年６月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、８人の委員が出席して開かれた。議事に先立ち、空席となっている委員長の互選を行い、委員長に稲村委員を選出した。

会議では、まず、ノーナレ「恋愛圏外」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委　員　長	稲村　修	（魚津水族館館長）
副委員長	東　　惠子	（東海大学名誉教授）
委　　員	坂田　守史	（(株）デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
	玉井　博祜	（能楽師／玉井屋本舗社長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	松田　裕子	（三重大学副学長）
	真能　秀久	（中日新聞社取締役人事労務担当）
	安井　香一	（東邦ガス（株）代表取締役会長）

（主な発言）

＜ノーナレ「恋愛圏外」５月２０日(月)放送について＞

○　ノーナレーションで何を狙っているのかどうか、ドキュメンタリー性を高めようとしているのかという点に興味をもった。トランプの映像から入るのは、とてもよかった。「アセクシュアル」という言葉は初めて聞いた。「他者に対して性的にひかれることがない人」のことを指すとのことだが、出演者の中村健さんが無理をしているのではないか、無理をさせられているのではないかと感じた。パートナーの榊佑奈さんが中村さんとの関係を「恋愛にこだわり別れにつながってしまうのだったら何も言わないほうがよい」と話していたことが、どこかかわいそうだと感じた。一方で、同じ家に一緒に住んでいるのだから、普通の夫婦と言ってもよいのではないかと思った。最近はセックスレスの夫婦という話をよく耳にするが、それとどこが違うのか私には理解ができなかった。中村さんは自分だけの理論で語っていて、番組もそれにしたがって進んでいくが、難しく考えず自然でよいのではないか、アセクシュアルだと言い切らなくてもよいのではないかと思った。自分に置き換えて考えても、恋愛も友情も自然のことで、何も難しくアセクシュアルと捉えなくてもよいのではないかと思った。

今回の２人も、１つの立派な夫婦の姿だと思った。

○　見ている間、アセクシュアルの「ア」は何なのか？と思いながら見ていた。つまりノンセクシュアルとどこが違うのかということだ。「ア」の示す意味を知りたかったが、番組では知ることができなかった。語意を厳密化すればするほど数が増え、一般の方は混乱してしまう。今回、「アセクシュアル」の主人公を登場させるのであれば、ＬＧＢＴも含め語彙の説明がいるのではないかと思った。恋愛は十人十色、百人百様、人それぞれ、つまり多様性を認め合うという狙いどおりのメッセージは届いたと思う。そもそも恋愛は多様であり、人類始まって以来の永遠のテーマのひとつだ。２～３年前からメディアでＬＧＢＴが頻繁に取り上げられるようになったが、それを扱っておけば人権問題に対して敏感であり、尊重しているというような単純な発想には陥らないように、意識を高く持ってほしい。

○　「圏外」という言葉を、果たしてこのタイトルに使用するのは適切だったのかと疑問に感じた。また、恋愛の多様性を認めるという割には、誰に対して圏外なのか、ということが分からなかった。演出の手法でナレーションをあえて入れないというチャレンジはよいと思う。制作者側から説明や解釈が押し付けられるように感じるのがあまり好きではなく、出演者の言葉をできるかぎり忠実に映し出すことは、新しい手法としてあってもよいのではないかと思った。特に、客観性やリアリティーを重視し、出演者の言葉のひとつひとつが大きな意味を持つようなテーマの場合は、視聴者が自分で考えられるので、この手法が生きるのではないかと感じた。一方で、ナレーションによる説明や解釈が加えられないことで、全体を通して視聴者側に要求される理解力や判断力、考える力などの求められるものが多く、ストレスに感じることもあるのではないか。また、音による場面切り替えや、ＢＧＭや効果音の選び方ひとつで、ナレーション以上に印象を操作している可能性があるとも感じた。ナレーションがないことで、顔のアップで独白が続くような場面が多く見られ、逃げ場がない息苦しさのような、やや不快に感じる面もあった。手法としては新しくてよいが、今回のテーマがこの演出に合っていたかどうかは疑問に感じた。今後、この演出手法がはまるテーマを追求していくとよいのではないか。

○　初めて「ノーナレ」の番組をみた。今まで番組を視聴しながらナレーターの声が番組主旨と合っていない、印象が違う等と勝手に評価していたが、ナレーションが視聴者に向けメッセージやストーリーの軸を担っていることを改めて認識した。さまざまな視点や言葉から中村さんという人間像がクローズアップされていくが、愛や恋愛の定義は時代や社会、価値観によって変容しているものである。アセクシャルという中村さんを取巻く個人的な人間関係を通じ彼独自の価値観を語り視聴者に見せ続け、特

に高校時代校舎の屋根から飛び降りる行為を行っている。他の映像も意図、作為的に映り、番組企画に疑問を持った。一方で、多様化する社会の中において、アセクシュアルということに共感を持つ人もいるかと思う。また多様性を求める社会や、個としての存在を理解するためには、一人、一人のことばから汲みとっていく「ノーナレ」の手法がわかりやすいのかとも考えたが、私はまだ答えがでていない。今後、今回のようなつぶやきを番組にすることが多くなってくる予感もある。しかし、表現の自由はあるものの、公共性という観点から時代や社会的価値観を少し俯瞰しながら番組制作に取り込む姿勢が必要ではないか。

（ＮＨＫ側）

場面を補完したり定義づけたりするナレーションを一切使用しないということで、制作の難易度が高い番組だった。取材当時はディレクターが、中村さんのことを理解するという段階であり、得心して分かる部分と分からない部分があったのではないかと思う。だが、テーマも含め、制作者側がすべてを理解しやすくして放送するということでなく、視聴者のリテラシーをある程度信用した部分があった。ＳＮＳなどでは、若者はおおむね好反応で、アセクシュアルを知らなかったという意見と、知らなかったけどこういう人もいるのだという意見が見られ、変な嫌悪感はなく、理解してもらっているような実感があった。

番組名については、さまざまなタイトルを考えた。「圏外」でも電波がつながらない場所で電話する用事もなければ苦痛ではないが、電波が通じる場所だと不安感を感じる。電話する用事がなければ問題がないのに、なぜか不安を感じるということが圏外という言葉に一番象徴されているのではないかということで今回の番組タイトルとした。圏外という言葉には、アセクシュアルの当事者の人たちが感じている気持ちを込めた。また、ＬＧＢＴからどんどん細分化しているということは指摘のとおりだが、細分化していることを伝えるのが目的ではなく、このような生き方の人がいるということを知ることで、自分も同じことを感じていたという共感や、よりどころになればよいと考えた。実際、何となく自分自身に違和感をもった人が、親とたまたま一緒に番組を見て、家の中で話すきっかけになったという声もいただいている。

○　ナレーションがないことを番組タイトルに付けること自体がいかがなものかというのが率直な感想だ。ドキュメンタリーは中味が勝負だと思うので、決してタイトル勝負でもないし、ナレーションがないということを勝負にしてもしかたがないのではないかと思う。ただ、ナレーションがないことによって番組の方向性が分からなくなる

と嫌だと思っていたが、さまざまな情景描写が多くあり、余白がある作りになっていてよかった。また、中村さんの独白と関係者の会話を活用することで、ナレーションがないという違和感も持たず見ることができた。しかし、今回はアセクシュアルという聞いたこともないテーマであり、このような人たちがどれほどいて、増減があるのか、男女の比率などの情報が全く分からない。一方で、ナレーションがないことで、中村さん個人の物語になっていることは利点であった。音楽も非常に効果的に使われていた。「恋愛圏外」という番組タイトルが分かりにくく、視聴者は番組を見ないのではないかと感じた。榊さんとの関係も普通の恋人どうしに見えるが、恋人ではなくパートナーだということだった。番組の最後に「恋愛って何ですか」という問いに対し、「わかりません」と答えていたが、言い得て妙で、この終わり方はよかった。

○　「ノーナレ」という番組のコンセプトは「描写」なのだと思う。過去に放送した「ノーナレ」を４本ほど見た上で、今回感じた違和感の原因は、描写というコンセプトから外れているためではないかと思った。「ノーナレ」は、意図して客体が存在しない構成で、１人１人が主体として語り、それを描写することがコンセプトだと思っていたが、今回は、冒頭のトランプの演出から恣意性が高く、ファンタジー的な導入になり過ぎていると感じた。おもちゃのロボットが倒れる描写や、所々にラブの文字が出てくること、最後の３人がそれぞれカメラを正面に見て恋愛について語ること、ディレクターが自ら質問を投げかけることなど、それぞれ違和感があった。淡々とした描写を受け手が自由に判断する、理解するということが、番組自体のコンセプトであり、訴えかけたいことなのではないか。今回の「恋愛圏外」の構成は他の「ノーナレ」と比べると異質で、この異質という感覚がよいのか悪いのか判断がついていないが、ノーナレのコンセプトからは外れていると思った。

○　すごく難しいテーマだった。アセクシュアルははじめて知る概念で、全く知らなかった。周りに聞いても、知っている人はいなかったが、意外と身の周りにいるのかもしれないと思った。「ノーナレ」を見るのも初めてで、シリーズであることを知らなかった。普通のドキュメンタリーはナレーションを軸にしており、視聴者もナレーションにすごく頼っているのだということを痛感した。最近の番組はナレーションに加え、テロップも多く入っているため話についていくことができて、理解も進み楽しめる。逆にいえばそのような演出に依存しているということだろう。番組を最初から最後まで集中して見る習慣がなく、ナレーションがあることで自分の知りたいところに気づくとともに、ナレーションがないと見にくいと思った。一方で、ナレーションはいろいろな解説を担っているため、恣意的に結論に誘導してしまうこともあると思った。ノーナレーションとなると意図の押し付けがない分、気楽に見られると思うが、逆に伝わらない部分もあると思った。見終わったあとに印象に残っていたのはお母さんと

の会話の場面。家族は分かり合っているはずなのに気づいてないこともたくさんあり、あえて踏み込まないことも多くあるのだと再認識した。自由にいろいろな立場の人が、いろいろなことを考えられるきっかけとなるという意味では、「ノーナレ」という手法もマッチしており、よい番組だと思った。

○　アセクシュアル、無性愛者という言葉を初めて知った。主人公の中村さんは他人に対して恋愛感情を抱かない人という解釈であった。登場人物がそれぞれの口で語っており、場面展開や登場人物もうまく組み合わされていて、ノーナレーションの違和感はなかった。ただ、ディレクターの質問に答えた場面は若干の違和感を持った。また、後ろに流れる音楽が何とも意味深な感じで、何か意図があるのではないかと思って見ていた。さらに言えば、群れるミズクラゲやイワシを見ているひとりぼっちの中村さんの映像は、孤独感のようなメッセージを込めているのだろうかと考えた。ナレーションがない分、映像や音楽で番組の伝えたいことを明確にする作り手の意図を感じた。最近のＮＨＫは、性的マイノリティーを取り上げた番組を多く作っている。ＮＨＫとしてマイノリティーの紹介をしていくのはよいと思うが、ＮＨＫが考える多様性の姿を見せてほしいと思った。

○　今回語られているアセクシュアルは、私が経験してきた恋愛事情とは異なる問題で、友情と恋愛の議論とは別次元の話のようだった。恋愛の範ちゅうを超えた「恋愛圏外」の世界があることをこの番組から教わった。ドーナツ、トランプ、おみくじ、卵焼き、河原の世界などを使って曖昧さをうまく表現していた。母親が問いただす場面は、視聴者の疑問と同じで、ワサビのように効いていた。ＬＯＶＥ？の問いかけの答えを視聴者に委ねる手法は、ノーナレの真骨頂のようにも見えた。一方で、ルールのないゲームを解説なしで見せられたようで、その上にＬＯＶＥ？の問いを何度もつきつけられると、いらだたしい気分にもなった。

○　中村さんの「恋愛をドーナツに置き換えて理解できた」という言葉には、理解できず唖然とした。男女の恋愛やもつれ、嫉妬などこそが文学や芸術を生む、人生の華だと信じてきた。古いのかもしれないが、中村さんと榊さんの男女の仲に、ある日突然愛が芽生える瞬間はやってこないのであろうか。クラゲやおみくじの描写も効果的で、お母さんや親友などの出演者もよかった。少子化の自由で平和な現代における若者の切り口として興味深く、身近なことのように見た。

（ＮＨＫ側）

音楽については映画を意識した作りで、一般的なドキュメンタリーよりも、少し音楽で注意をひく作りにした。ナレーションの

ない分、音楽により感情が左右されるという指摘は、そのとおりだと改めて感じた。

中村さんのお母さんは息子のことをわかってあげたい気持ちはあるが、本当はわからないとずっと思っており、お母さんが出て話すことで、視聴者が感じる疑問の１つを解消することができたのではないかと思う。

また、今回の主人公は動きが少なかったため、放っておいても転がっていくテーマのほうが、この手法には合っているのかもしれない。今回のように、じっくり人の話を聞くというときには、ディレクターの存在が気になるという人がいることもわかった。一方で、番組はどんな形をとったとしても、ドキュメンタリーであっても、何かしらの意図を持つものであることもまた事実だと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　５月２１日(火)のクローズアップ現代＋「刑務所が“ついの住みか”に！？～おひとりさまが危ない～」を見た。食事ができず罪を重ね刑務所に戻っていく話は聞いていたが、今回は介護を受けるために刑務所に戻っていくということで、とんでもないことになっていると思った。リハビリ施設のようになっているうえに、介助者も受刑者で、刑務所は何のためにあるのかと驚いた。最後に、元厚生労働事務次官のコメントで、定年退職も受刑と一緒だと言っていた。居場所があり、出番を作ることが大事だと言っていたのが、非常に印象に残り、身につまされる話だった。

○　５月２２日(水)のクローズアップ現代＋「追跡！ネット広告の闇　水増しインフルエンサー」を見た。ジャーナリズムの原点である現場主義がきちんと貫かれているという点で感心した。ネット広告をめぐる不正疑惑は昨年辺りから各国で指摘されていることは知っていたが、海外や国内の深くまで取材し、検証したということで見事だった。実際の証言をもとにキャスターが体験し、海外まで取材を広げ、さまざまな点から深掘りしており、とても分かりやすく、よかったと思う。

○　５月２９日(水)のクローズアップ現代＋「カスタマーハラスメント！客の暴言で心が壊される」を見た。お客様を神様とは思えなくなるような内容で、しっかりとＮＨＫの現場主義が貫かれていて、さまざまなサービスの現場を取材していてよかった。

○　５月３１日(金)のナビゲーション「売れない　貸せない　壊せない～空き家対策

新たな壁～」を見た。番組では田舎の家を守るのが使命と思って育った世代がここ２０数年で様変わりしたと言っていたが、たった２０年でこれほどまでに価値の転換が起こったことなどほかにあるだろうか。田舎を捨てて都会で暮らす長男も祖先を裏切ったという罪の意識に身を焦がしているのだと思う。その問題で心を病んでいる老人が多数いることを知っているが、誰にも相談できずに一人で悩んでいる。共通の悩みを抱えた老人がいることを知ったら彼らはどんなにか楽になるだろうと思う。次回のナビゲーションでは長男の視点から取り上げてほしい。

○　５月３１日(金)のいしかわ令和プレミアム　Ｊｏｕｒｎｅｙｓ　ｉｎ　Ｊａｐａｎ「小松　子ども歌舞伎」を見た。石川県小松市で毎年演じられる子ども歌舞伎を大変丁寧に取り上げていた番組だった。全国のお祭りについてシリーズ化して、ホームページなどでもっと手軽に見られたらよいと思った。世界の人々は、日本のコアな部分をもっと見たいと思っているのではないか。

○　６月２日(日)の「第７０回全国植樹祭あいち２０１９」(総合 前 10:55～11:54)を見た。天皇皇后両陛下が即位され、愛知県への初めての行幸啓ということで、興味深く見た。ＮＨＫはこのような番組を制作していく必要があり、記録として残していくためにも非常に重要だと思う。失敗が許されないという相当な緊張のもとで撮影したのではないか。撮影に際してさまざまな準備をしたのだろうと想像する。細かなところで気になる点もあったが、大過なく放送されていて安心した。必要最小限の映像と音声のみの淡々としたつくりで、テレビ番組の原点はこういうものだったのだろうと思った。ゲストの出演がないこともよかった。

○　６月２日(日)のＮＨＫスペシャル「彼女は安楽死を選んだ」を見た。自分の意思で安楽死をする者と、それを身近で見守っている姉妹の苦悩がよく出ていた。大変重いテーマなのだが、私の周りからも、すばらしい、よくやってくれたという声を特に女性から聞いた。個人的には、自分の意思決定ができるうちに自分で死に方を選べるような社会になってほしいと思っている。ぜひまたこのような番組も作っていただきたい。番組中の「安楽死に必要な諸要件」というテロップの中で、同じ文章中にもかかわらず「ない」という言葉を漢字とひらがなで書いてあった、ケアレスミスだろうが、気をつけていただきたい。

○　６月３日(月)に再放送された地球ドラマチック「惑星探査機　大集合！～前編～」と、１０日(月)に再放送された「惑星探査機　大集合！～後編～」を見た。かなりボリュームがある内容だった。惑星に飛ばす探査機について、開発のプロセスや苦難をくぐり抜ける様子、新たに分かったことなどが描かれ、没入して見ることができた。

技術的に高度なことをやっていて、新たにわかったことの内容もすごいと思うが、残念ながら、昔に比べれば、世界的に宇宙開発にかける予算は大きくはなく、技術的なステップアップの幅は小さい。インパクトが小粒だと感じ、時代の移ろいを感じた。撮りためられた映像や、コンピュータグラフィックスなど内容・構成等は、ＮＨＫならでの非常に充実感のある番組だった。渡辺徹さんの聞きやすいナレーションにも支えられていて、安心して見ることができた。

○　６月６日(木)の「まるっと！みえ」を見た。「同性カップルが地域に移住」というリポートで、同性カップルに対して地域の人が温かく接している様子が描かれていた。「こんな日が来るなんて」と言っていて、大変喜ばれていた。地域の様子をきちんと伝えていてとても嬉しかった。

○　６月７日(金)の静岡スペシャル ノーナレ「富士山と牛と僕」(総合 後 7:30～7:57 静岡県域)を見た。酪農一家の中で育った少年が、北海道の酪農高校に進学するために受験に臨むなかでの緊張感や、合格して家族と離れて北海道に行くことへの希望や不安など、とても丁寧に描いていた番組だった。ノーナレの良さが出ていた。制作にあたり、カメラが入ることが自然になるまで取材対象者につき合っていくように取り組んだということだった。もちろん家族の姿もよかったのだが、少年の揺れる気持ちを丁寧に追っている番組となりすばらしかった。さらに富士山のビュースポットがふんだんに盛り込まれた、４Ｋならではの番組になっていることもよかった。

○　６月９日(日)のＮスペ５ｍｉｎ.「シリーズ　教室の“声なき声”　第１回　いじめと探偵　～行き場を失った“助けて”～」を見た。ＮＨＫスペシャルの本編は見ていなかったが、たった５分間だけで十分に活動内容が伝わってきた。番宣とは違い、おもしろい番組だと思った。実際になぜ学校はいじめを隠すのかは、理由があるだろう。いじめはなくなることはないと思うので、どのような理由があるのかＮＨＫには取材してほしいと思った。

○　６月１１日(火)のクローズアップ現代＋「“性の偏見”取り払えますか？　～ＬＧＢＴに寛容な社会のために～」を見た。サブタイトルにすごく違和感を持った。ＬＧＢＴに寛容な社会のためにという言い方があまり寛容な言い方ではないのではないかと思う。タイトルにＬＧＢＴを取り上げるということで、見てもらいたい意図は分かるが、ここに違和感があった。本来であれば、多様性のある社会の中でＬＧＢＴをどのように受け入れられるかということが主題になる。だが、今回は国や企業の取り組みの紹介で、ダイバーシティーや多様性をどうやって受け入れるかという話がメインで、ＬＧＢＴの受け入れられ方については触れる程度の内容の番組であったため、タ

イトルと内容にギャップがあった。

○　６月１２日(水)のクローズアップ現代＋「“ノープラ生活”やってみた　プラスチックごみ削減の挑戦」を見た。プラスチック問題を考えるきっかけとしては非常にわかりやすい番組だった。その分、軽い雰囲気になっていたが、次回は身近なものではなく、間接的にプラスチックに支えられているものを取り上げてほしい。農業であれ、漁業であれ、大量のプラスチック製品を使って供給されている食べ物や医療品、交通インフラなどもたくさんあるので、検証を広げていってほしい。同じテーマで様々な年代のディレクターが制作していくと、違いが出てきて、おもしろいのではないか。

○　６月１３日(木)のにっぽん ぐるり 金とく「東海おもひで食堂」(総合 後 3:08～3:34)を見た。岐阜の名店を取り上げていた。これまでもこの番組はあったのか、今回が初めてなのか気になった。マスターや常連客なども、自然な姿で出演しているようでよかった。しかし、柳ヶ瀬が寂れたところのように映し出されていたことが非常に残念だ。近所の八百屋さんが跡継ぎを亡くされたときにごちそうを届けたという話が出てきて、思い出が本当に詰まった、よい番組だったと思う。ほかのお店があったらぜひ見たいと思わせる番組だった。

○　６月１４日(金)のいしかわ令和プレミアム「ホテル戦国時代～金沢　空前の開業ラッシュの裏で～」(総合 後 7:30～7:57 石川県域)を見た。金沢のホテルは生き残りに必死と言うことを初めて知った。番組中の「金沢の時代がやってきた」「機が熟した」という言葉にワクワクした。

○　６月１６日(日)の小さな旅「子安浜哀歌(エレジー)～横浜市～」を見た。最近「鶴瓶の家族に乾杯」に似た旅番組が乱立していて、脚本のない行きあたりばったりの旅番組が多い。私は脚本のないドラマを視聴者に見せるのはテレビ局の怠慢であると思う。小さな旅には脚本があり、取材を重ねて作っている数少ない旅の番組で、今回のもよい番組であった。何気ない街角の優しい人たちの穏やかな日常生活を、淡々と写していて、音楽もよかった。日曜の朝にふさわしいさわやかな番組であった

○　６月１６日(日)の明日へ　つなげよう　ふるさとグングン！「獣害は地域づくりの原石だ！～三重県津市美里町Ｐａｒｔ２～」をみた。地域おこしの現場を取材して番組にすることはよくあるが、この番組は、その後どうなったのか、持続しているのか、どのように変わったのかをきちんと取り上げ、掘り下げており、とてもよいことだと思った。地域に密着した、課題解決に向けたドキュメンタリーで、とてもよい企画だった。もともとは接点のなかった地域と地域がつながるという、よい結果が生み出され

ていた。取り組んでいる団体にとっても励みとなり、放送をすることで地域の人たちがまとまり、とてもよい効果があったように思う。

○　６月１８日(火)の新潟・山形で起きた地震のニュースについて、外国人向けに２次元コードが出ており、ＮＨＫワールド　ＪＡＰＡＮのホームページにつながるが、浅い情報しか得られなかった。ホームページを案内するのであれば、その中身の情報の充実も大事だと思う。一方、副音声では英語での情報提供が行われており、このような細かい情報は助かると思う。ただ、外国人にとって副音声に切り替えるのは難しいのではないかと思った。そうしたことも含めてなおさら２次元コードの先の情報が非常に重要になるのではないか。

○　６月１９日(水)のガッテン！「今すぐ出来る！オレオレ詐欺を元から断つ秘策」を見た。社会課題を捉えた番組で、聴覚による錯覚については初めて知った。具体的に、留守電が大変有効であるということを、地域の方と試しながら証明されていて、有意義だった。

○　福井局のキャンペーン「幸福度日本一ふくいの謎」は、幸福度ランキング日本一ということに対して、県民がなぜだ？と思っていることに答えてくれている。幸せを生み出していることと、課題も併せて取り上げられていた。客観性を持ったデータも提示され、幸福度日本一を単純によしとするのではなく、その背景も取り上げられていて、好感を持った。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０１９年５月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ＢＳ１スペシャル「２６歳の乳がんダイアリー　矢方美紀」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、「２０１８年度中部地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	小澤　正俊	（大同特殊鋼（株）相談役）
副委員長	東　　惠子	（東海大学名誉教授）
委　　員	井口　昭久	（愛知淑徳大学健康医療科学部教授）
	稲村　修	（魚津水族館館長）
	坂田　守史	（(株）デザインスタジオ・ビネン代表取締役）
	玉井　博祜	（能楽師／玉井屋本舗社長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	徳田　八十吉	（徳田八十吉陶房代表）
	松田　裕子	（三重大学副学長）

（主な発言）

＜ＢＳ１スペシャル「２６歳の乳がんダイアリー　矢方美紀」
５月２日(木)放送について＞

○　矢方美紀さんは元アイドルであることから多くの人の共感が得られ、視聴率が見込めるという下心で出演させてはいけないと思って見始めたが、懸念したような内容ではなかった。ただ、見る人によってはそのような下心があると感じたのではないか。若くかわいらしいアイドルががんを患った不幸な姿に、非常にやるせない気持ちになったが、声優になりたいという明確な目標を持ち、前向きに治療に臨む姿が非常に好ましく、すべてをありのままに写しているからこそ訴えかけてくるものがあった。ウィッグを外すシーンは、本人が見せたかったのか、制作者が頼んだのか気になった。また、治療の続く１０年間は出産ができないという事実が淡々と語られていたが、現実はとても厳しく、残酷さを感じた。番組途中で、矢方さんの地元・大分のふるさとの風景が出てきたのは良かった。都会で生きる若者にもそれぞれの背景があり、さまざまなことを背負っているということを隠喩的に訴えかけていたのではないか。全編を通して友人、知人がほとんど出てこず、芸能という華やかな舞台の裏に孤独感があ

ることを映し出しており、よい演出だった。ダイアリーは、本人のための記録と、番組化して公開するとでは、意味が大きく異なる。いつまでこのダイアリーを収録し続けるのかという点が気になった。

○　パステルカラーの手書き風のタイトルで番組が始まったが、どういう目的で作られた番組なのか考えながら見た。がんを患い、矢方さんは本当にショックだったと思うが、厳しい現実を受け入れ、明るく前向きに頑張っていこうという強い女性だったから成立した番組だった。同じ女性としても、その強さと前向きさに圧倒された。小池栄子さんのナレーションは悲観的でも、無理に元気を出しているわけでもなく、すっと耳に入ってきた。病とともに生きる女性の等身大の記録ということで、治療や医療の情報を中心にした内容だろうと思っていたが、印象としては外見に関する情報が多いように感じた。そこが新しい番組の切り口だったのかもしれないが、社会に向けたメッセージが何なのか分かりにくかった。矢方さんを応援したいという気持ちは伝わったが、個人を応援する内容よりも、治療の内容や副作用、仕事を取り巻く状況やアピアランスサポートなど一般の方にも共通する内容を描くとよかったのではないか。タレントとしての仕事環境や外見への高い意識、テレビや講演会で発信する場があることなど、矢方さんの環境は一般人とは異なる。一般の方にも参考になるような、治療を受けながら仕事を続けられる環境づくりの大切さ、患者を支える社会制度の必要性などを中心に紹介した方が、番組の公共的な役割を高めることができたのではないか。人前に出ることが仕事であるということもあり、映し出された映像は人に見せるためのものという面が少し強く出ていたように感じた。言えないほどつらいこともあるだろうが、常にポジティブで明るかったので、もっと内面が出ているとよかった。

○　矢方さんがかつて出演していた 2018 年５月１８日のナビゲーション「遅れる若者のがん対策」で、ＡＹＡ世代とは、思春期から３０代までの世代をいうということを初めて知った。かつては年齢に関係なく死は身近であったが、生命曲線が次第に右肩上がりとなり、現在の若者は死の影に怯えることはなくなっている中で、この番組は若者であっても死とは無縁ではないことを教えてくれた。出演する１か月前に手術をしており、これから化学療法を受けるという状況で、明るさは保っていたが、話している内容は切実で胸に迫るものがあった。若者のがんは、人生の途中で出会った悲劇だろう。進学や就職、結婚の問題が常につきまとい、一種の社会的な仲間外れにつながる。職場を一度離れ、また元の職場に戻ることのつらさや経済的な問題もあるはずだが、今回はそのような死の影はほとんど感じなかった。あっけらかんとした明るさで、若い視聴者が番組をみても、健康な若者の日常とあまり変わらない印象を持ったのではないか。この明るさの背景にある矢方さんの勇気が、番組の一番の特徴である。ひとりの若い女性が明るさを持ち、勇気を持ったからこそこの番組ができたのだと感

じた。

○　ＳＫＥ４８を卒業された後、希望に満ちて過ごしていた半年だったと思うが、大変な時期だっただろう。しかし、矢方さんは非常に明るく、そして前向きさが番組全編に満ちていたのが、視聴者にとっては救いであった。どの場面でもかわいらしく魅力的であったが、時折見せる、どうしてもカメラのほうを向けず下を向いている姿が、一番つらい瞬間なのだろうと推察した。カメラに映らないもっと悲惨な現実もあるのだろうと思うが、カメラに向かって指の先が変色する様子を映す姿を見て、訴えるものがあった。ナレーションも小池栄子さんがいつもの明るい口調ではなく、淡々と静かに務めていたのが非常に好感を持った。

（ＮＨＫ側）

がんは誰にとってもひと事でない病気だが、さまざまな番組で取り上げられているテーマでもある中で、我々はどのような番組を作るべきか検討した結果、このような形の番組になった。矢方さんの応援番組のようだったという指摘を頂いた。番組のホームページやミニ番組では、患者を支える先進的な取り組みをしている企業の情報を紹介するなど、いま必要とされている情報を伝えることも意識してきた。今回の番組では、１年間の取材をもとに彼女の生き方を大事にしながら構成したが、さまざまな受け止められ方があったことは､反省材料を頂いたと思っている。がんに関する番組では最先端の医療技術を取り上げるものが多い。だが日常の食事や体調管理などに関する患者目線の情報は少なく、いざという時に困ったという体験談も聞く。今後も公共放送として情報提供の取り組みを考えていきたい。

○　２５歳の若い女性が乳がんを患い、懸命に生きている姿、治療やケアの情報など、矢方さんを取り巻く状況についてよく分かった。最後に矢方さんが家族の支えについて口にしていたが、番組に家族が出演しないことでかえって焦点がぼけず、よい演出だったのではないか。本来なら苦しく、暗い内容の番組となるはずだが、矢方さんの明るく、前向きな個性を読み取って作られた上質な番組だった。描かれていた治療の内容や副作用などについて知らなかったため､具体的に描かれていて生々しく感じた。坊主頭のシーンは流さなくてもよいのではないかと思って見ていたが、変わらず明るい矢方さんの姿は、かわいらしく写っていた。明るく振る舞ってくれる矢方さんがいたからこその番組で、同じような悩みを持っている方や家族にとって励ましとなることも多かったのではないか。2018 年１０月８日の「矢方美紀　２６歳の乳がんダイアリー」では感動が大きかったが、前回に比べ今回は感動が少なく、途中でだらけてき

たように感じた。また、皆が矢方さんのように生きられるわけではないため、この番組を見て、かえって苦しく感じた人もいるのではないか。ホームページで治療や企業の取り組みなどさまざまな情報を公開しているとのことだが、番組内でその情報を紹介する工夫をしてほしい。また、バイアスを与える可能性もあるが、制作意図を聞いてからだと番組が見やすくなる。ホームページだけに頼らない紹介方法を検討したらどうか。

○　2018 年５月１８日のナビゲーション「遅れる若者のがん対策」を見たが、この番組は、私の人生に大きな影響を与えてくれた。矢方さんが出演されていたがんを人のことと思わず、いつ自分がなるかわからないし、勉強していきたいと思ったことを覚えている。その後、私自身、がんを経験し、当初はすごくショックだったが、今回の番組を見て自分自身も公表しようと思う勇気をもらい、真実を伝えることができてほっとした。死への恐怖や入院生活なども共感できることが多くあったが、矢方さんはまだ２０代であり、結婚や出産、仕事で悩むことも多いことだろう。ウィッグ姿には特に心が痛んだ。自撮り映像では、顔のまわりに花のイラストが描かれていたが、悲しくなるような印象を持った。矢方さんの今を楽しく生きること、声優になりたいと前向きに取り組む姿勢に脱帽した。番組では、がんの治療に取り組む矢方さんの生の声を聞くことができたが、がん患者同士でもお互いに生の声は聞きたいと思っている。矢方さんの優しさをおすそ分けできるようになりたいという言葉に励まされ、番組からたくさんのおすそ分けを頂いた。小池さんのナレーションもすごくよかった。

○　見終わって、矢方さんを応援する番組だと感じたが、むしろそれがよかったと前向きに捉えた。乳がんがテーマであるため、男性と女性とでは受け取る印象が変わると思った。視聴者が受ける印象の変化や違いも、今後番組を作る上で参考になるのではないか。病気を売りとしていたり、演出していたりすると強い非難を受ける可能性があるが、この番組は一人称的な距離感の近さや、症状のタイムラインの淡々とした伝え方など､さまざまな配慮がなされ､演出性を強くもたせない構成になっていてよかった。治療全体と現在の治療についてタイムラインで見せていて、映像がどの段階のものか明確になることで、治療の経過と心境や体の変化の関係がとてもわかりやすくなっていた。これからがん治療を行う人にとっても参考になったのではないか。自撮り映像と、取材でＮＨＫが撮影している映像、番組のため矢方さん自身が撮影している映像という３つで構成されていた。自撮り映像には、花のイラストのフレームに入れて雰囲気を変えていた。花のイラストやデザインも、矢方さん自身の感性をよく表していて、出版された矢方さんの本のデザインとも統一感がありよかった。また、素の表情で語られていることが多く、病気に対する戸惑いの表情や寂しさがあった。一方、ＮＨＫが撮影している映像にはタレントとしての表情がすごく出ていて、同じ病

気を持っている人や頑張ろうとしている人に対するメッセージを感じた。矢方さんのタレントとしての力が発揮されていたのではないか。大分の風景とラストシーンは矢方さん自身が番組を意識して撮影したと思われる部分もあったが、プライベートな姿もかいま見ることができた。さまざまな角度、さまざまな種類の映像を通して矢方さんの人間像を見ることができ、がんやその治療、生き方について知ることができた。明るい未来をつかみにいくという矢方さんの姿は、見る人にとってさまざまなメッセージを伝えていた。偏りのある演出や構成ということではなく、さまざま角度で矢方さんの姿を見せることによって、番組が成立していると感じた。たっているが、境界がどこにあるのかわからず、因果関係やデータも納得できるものではなかった。ばかばかしいテーマにまじめに取り組む、アプローチを変えるということであれば、名古屋が全国の中で際立っている特徴をテーマにしたほうが受けるのではないか。バラエティーなのだとしたら、データや調査の納得感よりも、テーマの設定がより重要だと感じた。

○　2018 年５月１８日のナビゲーション「遅れる若者のがん対策」では、元アイドルの矢方さんが華やかな舞台で、乳がんの告知を受けた苦悩とがんと向き合う真摯（しんし）な姿を公開する潔さに鮮烈な印象を受けた。今回は抗がん剤治療の行程が、矢方さんを取り巻く日常を通じて描かれ、少しずつ回復し、明るい未来を思い描き、自分で生きていくという様子が描かれていた。テロップで、抗がん剤治療の過程が明示されていてわかりやすかった。ダイアリーというタイトルの通り、毎日の心情が自撮りによりつづられていて、この映像が番組の真髄となっているのだろうと考えた。しかしながら、自撮り映像が花柄のイラストで縁取られている演出が特異に感じられた。花柄の飾りと壁の差に違和感を持ち、なぜ花柄なのだろうか理解に苦しんだ。表情を中心として自撮り映像で日々を語るならば、もっとわかりやすい表現があったのではないかと思った。2018 年１０月８日の「矢方美紀　２６歳の乳がんダイアリー」では、鮮烈な印象を受けたが、今回は平坦に見えてしまった。３人に１人はがんで死ぬともいわれている時代で、ステージや原発巣によって治療方法もさまざまである。医者は最先端の抗がん剤投与を勧めているが、患者のライフスタイルから治療法の選択もあると聞いている。矢方さんを主人公にしたのはよかったと思うが、ＮＨＫの得意とするがん治療の可能性を併せて紹介したほうが分かりやすくなったのではないか。

○　番組を見て、乳がん患者が多いことにあらためて驚いた。今回は若い人の事例で、じっくりと時間をかけて取材していたことに深く敬意を表する。同じくがん治療に取り組む人たちに対して強いエールとなったことはもちろん、番組を見た若い人々にも、これからの人生に明るい光を与えてくれたのではないか。矢方さんの姿だけでなく、アピアランスサポートなど、治療を応援するサポートを紹介していたこともよかった。

主人公の矢方さんは大変若いにも関わらず、想像以上に強い精神力を持っており、自分の夢に向かって生きていこうと病に立ち向かっている姿に驚いた。また、日記のように日時も表示しながら経過を追っていくという演出も見応えがあった。がんを患うという人生の危機に直面しても、やりたいことに取り組むという意思が非常に明確であった。若いときにＳＫＥ４８でやり遂げた経験が、大きな支えになったのだと思った。矢方さんが思いを述べていたが、ひとつずつの言葉が若い人に感銘を与えたのではないか。若いときは夢中で何かをやり遂げることが大切で、強い精神力を養ってくのだとあらためて感じた。全体の流れも非常にスムーズで説得力があり、最後のサクラ満開の映像には思わず拍手した。

（ＮＨＫ側）

この番組にはカメラマンは同行させず、ディレクターである私自身が一人で小さいカメラを使い、取材して撮影するという手法を取った。番組を作る上でこちらが矢方さんをリードせず、作為を持って撮影をしないということを心がけた。自撮り映像で話してほしいことを指示したこともない。彼女が自発的に話したいと思うことを撮っている。ウィッグを突然外したシーンは、いったん撮影をためらったが、撮って構わないということで撮影した。矢方さんが伝えたいことを淡々と記録し、近い距離感でずっと向き合っていくということを１年間続け、その結果を時系列で並べていった。できる限りありのままに取材するという過程の中で、ウィッグを外すという意思が表れたのだと思う。

○　自撮り映像では、表情を見たいのだが、花柄のイラストで表情が見えにくくなり、デザイン的にも違和感があった。また、がん治療の方法はさまざまな選択肢があり、患者が選べるのだということを情報として取り入れた方がよかったのではないか。また、自分の治療にどう向き合うかという、がん治療への向き合い方も紹介した方がよかったのではないか。

（ＮＨＫ側）

部屋で自撮りしている映像だけではなく、花柄のスーパーでデザインを加えることで若い女性にも見やすくなるように考えた。

さまざまな治療方法があることは承知している。中には民間療法を選択する方もいらっしゃる。矢方さんは標準とされる治療方法であったため、治療経過も特段の配慮はせず細部までタイムラ

インで紹介した。もし、標準治療とは異なる治療法であれば、それを紹介する際には丁寧な説明、さまざまな配慮が必要となる。

＜放送番組一般について＞

○　４月１９日(金)の「愛知の平成スペシャル」(総合 後 7:56～8:41 愛知県域)を見た。この３０年の愛知県民の生活の変化といった内容に期待していたが、そういった内容は一部分で、大きな出来事を淡々と振り返るだけで、しかもスポーツや風習の話題が多く残念だった。例えば自治体の合併やバブル崩壊、リーマンショックなど、政治・経済・文化といった観点から、この３０年で愛知がどのように変わってきたかが描ければ、納得できて考えさせられる番組になったのではないか。また、もっと生活に関わる庶民的な発想で取り組んでほしかった。尾張地域の花嫁の風習や名古屋めしなどの文化面も扱ってほしかったし、東海地震への備えといったことにも触れてほしかった。平成の時代が完結するだけでなく、令和につながる資産や負債を明らかにするという観点がなく、物足りなかった。

○　４月１９日(日)の静岡スペシャル「カワイイが地方を救う！～東京ガールズコレクションの挑戦～」を見た。番組タイトルがとても興味深かった。ファッションショーの華やかな舞台を支える人たちや、それを支える人たちの喜びの表情に感動した。若者が都会に出て行ってしまう状況も描かれていたが、モデルの衣装を静岡の伝統工芸品で作る過程にクローズアップし、繊維工場とモデルとのコミュニケーションによって衣装が作り上げていく様子などが丁寧に取材されていた。この番組のように地域にスポットライトを当て、丁寧に取材をして作り上げていくことは、これからの地域放送局の大きな役割だと思った。

○　４月２６日(金)のナビゲーション「孤立の果てに… ～刑務所からの報告～」を見た。全国的に犯罪者が減る中、高齢の受刑者は増加していることや、受刑者の中に認知症の患者がいることが問題になっているということを初めて知った。介護の人手が不足しており受刑者同士で介護をしていることにやり切れなさを感じ､道徳や倫理面、法律の運用にも難しさがあることを暗示しているようだった。万引きをしてしまった認知症の高齢女性への取材は問題の実態に迫っていたし、高齢者の孤立に問題があるというコメントにも迫力があった。一方で、地域生活定着支援センターについての解説で犯罪の原因や刑罰の後をどうするかという課題についてふれていたが、そもそも認知症の犯罪者がなぜ病院ではなく刑務所にいるのか、という問題の真相にも迫ってほしかった。また、認知症の犯罪者の介護保険制度との関係や、養護老人施設などとの関連性も知りたかった。認知症の受刑者に規則を守らせる場面は、そもそも日常生活に支障があることが認知症であるにも関わらず、そのことに言及していないことに

違和感があった。さまざまな問題を列挙した印象が残ってしまったが、編集を工夫すればもっとよかったのではないか。

○　４月２６日(金)石川スペシャル「いしかわ平成史～激動の３０年～」(総合 後 7:30～7:55 石川県域)を見た。案内役の篠井英介さんが落ち着いていてよかった。ワクワクするような音楽が使われており、何の曲なのかとても気になった。平成の３０年を３０分にまとめるのは大変で、作り手のセンスの見せどころでもあると感じた。金沢駅の新幹線開業の際に多くの苦労があったことを知った。また、スポーツや災害などさまざまな映像資料を丹念に掘り出し、能登や加賀など石川県の全域を網羅していたこともよかった。今後福井まで伸びる新幹線の話題も嬉しく、新時代に期待が持てる番組だった。

○　４月２６日(金)の越中とやまスペシャル「富山イドバタトーク　ちょっこし不満しゃべらんか？」(総合 後 7:30～8:13 富山県域)を見た。ＬＧＢＴをテーマに、北陸は幸福度ランキングでは上位にも関わらず、性的少数者は国内では最も生きづらいと感じている地域だという調査データを示したテーマで、とてもよかった。富山以外の出演者やＬＧＢＴではない出演者も入ることで会話がナチュラルになり好感が持てた。今後、外国から富山に移り住んだ人や政治・行政など、いろいろなテーマで展開してほしい。

○　４月２８日(日)のダーウィンが来た！「世界初調査！東京の秘境　孀婦岩」を見た。ウミコオロギやハサミムシの映像は目を覆うほど気持ち悪かったが、ドローンの映像やわかりやすいイラストなど工夫されていてよかった。また、研究者の生き生きとした表情に興味を引かれた。今後もＮＨＫならではの徹底した調査で、孀婦岩の特異な自然環境や生態系を解明してほしい。

○　４月２９日(月)の総決算！平成紅白歌合戦「第１部」(総合 後 7:30～8:55)と「第２部」(総合 後 10:00～11:30)をみた。第１部は北島三郎さんや松田聖子さんなど、紅白になじみの歌手が出場しており、ほっとするような感覚を味わい、年末の「紅白歌合戦」を見ているような気分になった。第２部は、志村けんさん、ビートたけしさんなど大御所のお笑い芸人が出演していて、当時のギャグや印象的な言葉が紹介されており、自分の若い頃と重ねて、笑いのルーツをひもといてもらったような懐かしさを感じた。

○　４月３０日(火)のゆく時代くる時代～平成最後の日スペシャル～「ゆく時代くる時代　ついに“時代越し”！」(総合 後 11:25～5 月 1 日(水)前 0:30)を見た。想像して

いたよりもあまり仰々しくなくてかえって驚いた。「ゆく年くる年」のような荘厳な内容を期待していたので、バラエティーに寄った内容に拍子抜けした。

○　５月２日(木)のひとモノガタリ「知らないワタシと出会う旅」(総合 後 6:05～6:34)を見た。遺伝子の分析によって自分のルーツが明らかになっていくモデルの姿が印象的で、よい番組だった。番組の企画やナレーション、取材や構成もよく、見応えがあり心を打つ内容だった。

○　５月２日(木)の「ミラクル！カウンセリング　―世界の賢者が日本を救う！？―」(総合 後 10:00～10:50)を見た。エンターテインメント性や教養という面でも中途半端な印象で、残念に感じた。現代の日本人の悩みを、文化や生活習慣が全く異なる部族の価値観で解決を図るという切り口はよかったが、相談者が多く、相談内容もそれに対する部族の人たちの回答もおもしろさが感じられなかった。司会の社会派芸人としての目線もいかされておらず、知的バラエティーとは感じられない構成だった。多様な部族の価値観を取り上げるのであれば、文化人類学的な視点を取り入れてもよかったではないか。

○　５月２日(木)のショートストーリーズ「修理屋人生」(総合 後 1:05～1:30 東海３県ﾌﾞﾛｯｸ)を見た。主人公の生きざまや若い人への伝承など、普遍的な驚きと感動があった。主人公のひとつひとつの言葉がとてもよく、生きがいのある人生を送ってきたからこその人生観だと感じた。若い視聴者にとってもよい道しるべになるような番組だったのではないか。

○　５月５日(日)のＮＨＫスペシャル　人体Ⅱ遺伝子第１集「あなたの中の宝物“トレジャーＤＮＡ”」、５月１２日(日)のＮＨＫスペシャル　人体Ⅱ遺伝子第２集「“ＤＮＡスイッチ”が運命を変える」を見た。これまでの科学の通説を覆すようなとても興味深いテーマでおもしろかった。２回シリーズだったこともよかった。第１集は、冒頭から矢継ぎ早に展開していき、視聴者の興味を引く内容だったのではないか。ゲストの唾液から検出されたＤＮＡだけで、顔を忠実に描き出す再現度の高さには、とても衝撃を受けた。遺伝子とＤＮＡの違いという切り口も、とてもわかりやすかった。タモリさんと山中伸弥さんのダブル司会は豪華で、話し方もわかりやすく、ウィットに富んでいておもしろかった。ゲストのコメントにも場が和む効果があった。科学技術の進歩に驚いたが、それ以上に、スタジオの映像技術が興味深く、ＣＧによる人体やミクロの世界も含めて、ＮＨＫの技術力の高さを感じた。

○　ＮＨＫスペシャル　人体Ⅱ遺伝子「あなたの中の宝物“トレジャーＤＮＡ”」を見

た。遺伝子はＤＮＡの２％に過ぎないということを初めて知り、残りの９８％は「トレジャーＤＮＡ」だという切り口がとてもワクワクした。人体のおもしろさ、すごさ、精密さについて考えさせられた。長寿につながるＤＮＡや病気から体を守るＤＮＡが今後期待されるが、技術が進歩すると人間は死ぬことができなくなるのではと、楽しみよりも怖さを感じた。

○　ＮＨＫスペシャル　人体Ⅱ遺伝子「あなたの中の宝物“トレジャーＤＮＡ”」と、５月１２日(日)のＮＨＫスペシャル　人体Ⅱ遺伝子「“ＤＮＡスイッチ”が運命を変える」を見た。がんや肥満といったさまざまな問題が遺伝子によって解決されるといった明るい未来として描くようなエンディングだったが、明るさよりも怖さが印象に残った。地球温暖化や放射能汚染、人口爆発、戦争、飢餓、ＡＩといった問題と同様に、遺伝子技術の発展にも光の側面だけではなく影の側面が出てくると思うが、山中さんの「使い方を間違えないように賢い使い方をしていきたい」という言葉に救われる思いがした。よい面を強調するのであれば、あわせてその問題点や課題を拾い上げ、さらに解決策を示すような番組を作ることがＮＨＫの責任だと思う。

○　５月８日(水)のガッテン！「虫歯リスクが激減！？発見！新★歯みがき法」を見た。かねてから歯磨きをしているのに虫歯ができることを不思議に思っていたが、その疑問を解決してくれる番組だった。スウェーデンでは歯磨きの後に口をゆすがないという方法があり、よいと思った。

○　５月９日(木)の所さん！大変ですよ「そんな所に！？お父さんの居場所」を見た。お父さんの居場所はどこだ、というテーマがおもしろかった。ナレーションもおもしろく、会話もばかばかしくも品がありよかった。「フラリーマン」や「テリトリー」の説明など、納得できるような専門性もあり、こういった企画を考えるディレクターがＮＨＫにいることがうれしかった。

○　「かがのとイブニング」を見た。リニューアル当初は、キャスターの不慣れな感じを受けたが、今は落ち着いて見られるようになった。熊谷彩香キャスターも落ち着いた雰囲気でニュースを伝えており、安心して見ている。

○　５月２日(木)の「植物に学ぶ生存戦略２　話す人・山田孝之」（Ｅテレ 後 10:50～11:20)を見た。山田孝之さんや林田理沙アナウンサーが表情を変えずに淡々と話をする姿がとてもシュールだった。徹底的なシュールな演出や構成がとがったコミカルさを生んでいた。続編を楽しみにしている。

○　５月４日(土)に再放送されたサイエンスＺＥＲＯ「不老不死！？のほ乳類　ハダカデバネズミ」を見た。がんの最先端の治療などを他の番組で取材する一方で、がんにならない生物が地球上にいることに驚いた。ＮＨＫの高い取材力を感じた。子孫を残す方法やアリの世界の生き延びるしくみなど、興味深い内容だった。エンディングで、「文化や感情、教育といったものを後世に伝えていくことができないと人間とは言えない」と問いかけており、人間の役割や寿命について考えさせられた。

○　５月１日(水)のふらっとあの街　旅ラン１０キロ「金沢　百万石ラン」を見た。旅ランナーの福島和可菜さんがすごく元気で、爽やかだった。海外の方も近江町市場を楽しんでいて、音楽の軽快さと相まって、見ていて楽しい内容だった。福島さんの語りとナレーションもすばらしかった。スタッフも一緒になって走る姿はおもしろく、見慣れた金沢市内の景色が新鮮に見えた。サクラが満開の様子も圧巻だった。

○　５月２日(木)のＢＳ１スペシャル「ヨウジ　ヤマモト～時空を超える黒～」(ＢＳ１　後 10:00～10:49)を見た。近年、ファッションや音楽から大きな流行が生み出されていないという状況の中、ヨウジヤマモトの変わらないスタンスが今の時代や社会に対する問いになっているように感じた。手を動かしながら考え、悩んでいくというプロセスからクリエイティブが発揮されていく様子が表現されており、社会に対して反抗の原動力など、ヨウジヤマモトのファッションの背景をとても感じることができた。番組の演出や構成、メッセージ性も含め、秀逸な番組だった。

○　４月２１日(日)の釣りびと万歳「能登の“メバル３兄弟”を制覇しろ！～中川大志 石川・七尾湾」を見た。あまり釣り番組を見たことがなかったが、この番組は春の海のすがすがしい気持ちが伝わり、爽やかな気持ちになった。ゲストの中川大志さん、ナレーションの田中美佐子さんにも嫌みがなくよかった。

○　５月１１日(日)のレアめし「世にも不思議な“給食”が続々登場！」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 11:00～11:29)を見た。漆の器を学校給食に用いている事例など、とても興味深く見ることができた。高額な漆器を小学生に使わせることによって、単に物を大切にするだけではなく、食べ方の教育にまで結び付けている取り組みはすばらしかった。児童が食器をていねいに扱っている場面は、まさに食育の王道を行くものだと思った。ジビエバーガーの場面で「命をいただく」という説明があったが、もっと深みが出るとよかったのではないか。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局

２０１９年４月ＮＨＫ中部地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ中部地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ名古屋放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、境界調査バラエティー　ニッポンのワケメ「第４弾」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	小澤　正俊	（大同特殊鋼（株）相談役）
副委員長	東　　惠子	（東海大学海洋学部環境社会学科名誉教授）
委　　員	井口　昭久	（愛知淑徳大学健康医療科学部教授）
	稲村　修	（魚津水族館館長）
	坂田　守史	（(株）デザインスタジオ・ビネン取締役）
	玉井　博祜	（能楽師／玉井屋本舗社長）
	都築　紀理	（愛知県農業協同組合中央会常務理事）
	徳田　八十吉	（徳田八十吉陶房代表）
	松田　裕子	（三重大学副学長）

（主な発言）

＜境界調査バラエティー　ニッポンのワケメ「第４弾」

３月１６日(土)放送について＞

○　「ワケメ」という歯切れのよいフレーズや音楽などテンポがよく、出演者にも好感が持てた。スタジオがカラフルで、わくわくしながら見ることができた。「ワケメン」が着ていたジャケットのデザインがおもしろく、調査のために走り回っている場面もテンポのよさを引き出していた。「美人のワケメ」では、秋田の女性たちが「秋田美人」というイメージに対してプレッシャーを感じながらも、そのブランドを守っていこうという意識があることを知り、驚くとともに尊敬した。博多の女性たちの意識の高さも感じた。かつては名古屋も芸どころとして美人が多いイメージがあったとのことだが、その理由をもっと知りたかった。シャンプー「かゆいところありますか？」については、実際に美容室で長時間調査をしたり、5,000 人にアンケート調査をしたり、大変だと思った。頭のかゆみが肩こりや冷えと関係しており、住宅の暖房性能にまで行きついたことはおもしろかった。番組のエンディングもよかった。

○　楽しく、あっという間に見ることができた。全体的にカラフルな印象だったが、ス

タジオのセットや「ワケメン」の衣装の色数が多すぎて見にくいと感じた。衣装を２色にするなど随所で「ワケメ」を表現していたが、スタジオのセットのデザインも「ワケメ」のコンセプトに沿ったものにしてもよかったのではないか。一方で、テロップや調査したデータを紹介する場面など、統一性のあるデザインで印象がよかった。興味深いテーマを提示し、それを掘り下げることが番組の魅力だと感じた。ロケをしながら内容を掘り下げていくという展開と構成がとてもよく、飽きずに興味深く見ることができた。番組を最後まで見てもらおうという工夫が感じられた。博多に美容関係の店舗が多いのは女性比率が高く競争が激しいから、という展開や、頭のかゆみと肩こりの因果関係、住宅の断熱性能の普及率など、しっかり調査されており、それがテンポよく紹介されていた。明確なデータにもとづいて「ワケメ」の切り口をはっきりさせるという番組のコンセプトが、とてもおもしろかった。「ワケメ」を明確にするという努力や制作者の熱量が番組をおもしろくしているのだと感じた。データの緻密さとエンターテインメント性にギャップがあり、とても興味深く見ることができた。

○　日本を二分するような「ワケメ」ではなく、テーマに沿って際立っているところを抜き出してその特徴を分析した番組という印象だった。テーマに該当する県民にとってはおもしろいと思うが、該当しない県民にとってはあまりおもしろく感じられないのではないか。「ワケメン」の衣装は目がチカチカした。スタジオのゲストの人選が日本全体の縮図になっておらず、アンケート調査の結果とゲストの回答にかい離があったことに違和感がった。美人が多い県のイメージについて、３人のゲストが「福岡」と書いていたが、「福岡美人」ではなく「博多美人」のイメージがあるからだとフォローがほしかった。「秋田美人」のポスターに起用された５人が出演していたが、ポスターには６人写っており、１人欠けていることが気になった。かつては美人といえば芸者のイメージだったという話の展開には感心した。地域で美人のイメージを維持する努力をし、ブランド化したことはすごいと感じた。博多は女性比率が高いから競争が厳しいという分析は、訴求力があった。一方で、「秋田美人」は自然の美で、「博多美人」は人工の美という切り口は、博多の当事者にとってはあまりよい評価ではないのではないかと感じた。かつては名古屋も芸どころとして美人のイメージがあり、そのイメージを保てなかったという紹介があったが、もっと深掘りしてほしかった。シャンプー「かゆいところありますか？」については、結果がほぼ東日本と西日本に分かれており、驚いた。

○　スタジオに「ワケメン」がたくさんいたが、必要性が感じられなかった。「秋田美人」と「博多美人」についてさまざまな観点から検証し、博多の女性の意識の高さに結び付けた展開や、名古屋美人にも触れた点はよかった。一方で、ほぼ２県だけの話で「ワケメ」と言えるのか疑問に感じた。シャンプー「かゆいところありますか？」につい

ては展開が速くてよいと感じたが、データの信ぴょう性に疑問を感じた。住宅の断熱性能が肩こりに影響しているのではと紹介されていたが、そうだとすれば冬以外のかゆみや肩こりのデータは比較対象ではなくなるのではないか。バラエティーではあるが根拠があいまいなデータをもとに、わかったような印象を与える番組はＮＨＫらしくないのではないか。専門家も出演していたが、ストーリーありきではめ込まれた印象だった。

（ＮＨＫ側）

データを取った時期や詳細な数字を明らかにするなど、疑問を持たれないよう視聴者に提示していきたい。

○　「秋田美人」については、日照時間が少なく、色白で肌がきれいだという紹介に納得した。「博多美人」については、化粧品の購入額が多いなど、美意識が高いことに感心したが、２つの県の比較で終わってしまったことが残念だった。シャンプー「かゆいところありますか？」については個人差とも言える程度で、人間関係を構築する手段といったことや肩こりに結び付けることに疑問を感じた。無理にテーマを掘り下げていた印象で、テーマの割に番組がおおげさだったのではないか。

○　以前は日ごろ気づいていない習慣や潜在意識にふれるようなテーマだったが、「美人のワケメ」というテーマは日本人の意識の奥底にあるものに迫るような人間臭さが感じられなかった。シャンプー「かゆいところありますか？」についても、無意識に行っている動作など環境によって異なる習慣がテーマではなく、かゆみというさまざまな原因によって起こる症状がテーマになっており、あまり意味を感じられなかった。かゆみを肩こりや住宅の断熱性能と関係づけていたが、無理があったのではないか。バラエティーだということを強調した上で、もっとユーモアも必要だったのではないか。

○　「境界調査バラエティー」とうたっているが、境界がどこにあるのかわからず、因果関係やデータも納得できるものではなかった。ばかばかしいテーマにまじめに取り組む、アプローチを変えるということであれば、名古屋が全国の中で際立っている特徴をテーマにしたほうが受けるのではないか。バラエティーなのだとしたら、データや調査の納得感よりも、テーマの設定がより重要だと感じた。

○　スタジオセットや「ワケメン」とその衣装、日本地図の配色など、統一感のあるコーディネートで、ビジュアルへのこだわりが感じられた。芸者にルーツを持つ「秋田美人」を誇りとし続け、ブランディングや商品開発をしてきたという話にとても興味を

持った。対照的に、「博多美人」は美容に関心が高く高額なお金をかけ、美しくなるために自分を磨いている様子など、美人と言っても全く異なるあり方がとても興味深かった。一方で、シャンプー「かゆいところありますか？」については、頭のかゆみと肩こりの関係性について皮膚科の医師がコメントしていたが、あいまいだと感じた。住宅の断熱性能との結び付けも大ざっぱに感じた。そもそも地域で分けられるテーマだったのか疑問に思った。今後は徹底的な調査や分析による内容に期待したい。

○　驚くようなテーマで興味深かったが、番組のコンセプトや狙いがしっかりしていないのではと感じた。興味本位ではなく、日本の文化や風土、伝統をいろいろな視点で見る上で、「ワケメ」という観点や切り口で日本の歴史や文化の特質を明らかにしていくような番組にしてほしい。番組を続ける上で、日本人や日本文化とは何かという日本人がより興味を持てる内容が必要ではないか。「ワケメ」ということばには分断の意味合いを感じるので、日本人や日本文化のよさといった意味合いが感じられるようなものがよいのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

以前の番組は地域の「ワケメ」を探るというアプローチだったが、今回は地域の「ワケメ」を紹介しつつ、その理由を深掘りしていくというアプローチを取った。過去４回の放送を検証し、引き続きしっかり調査するとともに、幅広い視聴者に納得いただけるように制作していきたい。

○　例えば肩こりと住宅の断熱性能が関係あるのであれば、それが本当か掘り下げたほうがおもしろかったのではないか。安易に関係をつなぐのではなく、きれいな「ワケメ」にならなくても、疑問を感じたところを突っ込んで科学的に検証していったほうが、視聴者にとってもおもしろいと思う。

（ＮＨＫ側）

今後もＮＨＫならではの取材力をいかして実験・検証していきながら、バラエティーとして飽きさせない工夫もしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月１５日(金)のナビゲーション「住めなくなっても守りたい～“無住集落”元住民たちの取り組み～」を見た。人口減少の中で住民が住まなくなった無住集落が増えていく現実が明らかにされていたが、それを悲観するのではなくポジティブに捉えていくという番組の構成で、空き家を生かした民泊やリノベーションといった潮流が生まれている中で、住んでいなくても集落を維持管理するという地域の取り組みのあり

方が、さまざまな事例とともに取り上げられており印象的だった。初めて知る事例もあり、新たな気づきがあった。集落からの撤退を選んだとしても、住民の努力や活動のしかたによっては集落の文化やコミュニティーの維持が可能だということを知ることができ、無住集落に希望を与えられると感じた。福井県上根来集落の事例だけでなく中部地方のさまざまな地域の事例を取り上げ、それぞれ活動の幅や地域の状況が異なることもわかり、とても参考になった。

○　３月１５日(金)の富山の宝スペシャル「立山の恵み」(総合 後7:30～7:55 富山県域)を見た。一般の人が目にする機会が少ない映像や地道に撮影してきた映像がふんだんにあり、タイトルどおり宝が満載だと感じた。撮影や編集もうまく、映像がきれいだった。ナレーションもとてもよく、高く評価したい。立山を取り上げた番組は多いが、異なる視点の番組も制作してほしい。

○　３月１５日(金)のまるっと！みえスペシャル「三重県民が選ぶ！三重の平成１０大ニュース」(総合 後7:30～8:42 三重県域)を見た。幅広いジャンルのニュースを映像とともに振り返るだけでなく、それぞれのニュースについて別の角度から追跡取材をしており、ＮＨＫの取材力が発揮された構成だった。ニュースの掘り下げに加えて県民へのアンケート結果と制作者の企画力を融合させたようなコーナーや街頭インタビューなどが散りばめられていた。一見バラエティー番組のようでしっかりした取材力の裏付けがある、社会派の企画になっていたと思う。地元愛や誇りといった感情を呼び起こすような､とてもよい番組だった｡他県でも展開できるような優れた企画だったのではないか。

（ＮＨＫ側）

津放送局が平日夕方６時台の県域ニュースで１年間取り組んできた特集企画「三重の平成」の集大成として制作したが、若手が中心となりのびのびと制作したことがよかったのではないかと考えている。

○　３月１７日(日)のＮＨＫスペシャル　スペース・スペクタクル　プロローグ「はやぶさ２の挑戦」を見た。これぞＮＨＫというロマンあふれる番組だった。３億キロかなたの天体からＪＡＸＡに送られてくる信号を解析し、それをＣＧで映像化しておりよかった。「はやぶさ２」が着陸する過程は、まるで１人の人間のようで、心から応援することができた。着陸に成功した後の管制室の歓喜の様子も映像で見ることができてありがたかった。関わった人たちが誇らしげで、宇宙開発のすばらしさを感じた。

○　３月２３日(土)のＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」(総合 後9:00～10:30)を

見た。ドキュメンタリーの代名詞のようなＮＨＫスペシャルをドラマ仕立てにしたことでとてもわかりやすかった。特に中学生の受け子は言葉では聞くことがあってもイメージがわかなかったが、番組で中学生が犯罪に加担しているのを目の当たりにすると「こんなことがあり得るのか」と思うほど驚いた。どう見ても子どもなのに、だまされる人がいるということにも驚いた。さまざまな場面で深い取材力を感じ、とてもリアリティーがあった。興味本位で引き受けてしまい、そのままずるずると抜けられなくなっていく様が描かれており、おそろしいと感じた。身内からこうした子どもが出てしまうのではと誰もが恐怖を感じたのではないか。一方で、運び屋の男性が涙を流す場面には、救われる思いがした。

○　ＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」を見た。犯罪組織の具体的な状況や被害者の実状がとてもリアルに感じられた。実際の映像とドラマ仕立てのコンビネーションがよく、桃井かおりさんなど出演者の演技も秀逸で、思わず見入ってしまった。中身のあるよい番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」を見た。オレオレ詐欺の被害者役だった桃井かおりさんが犯人をかばう姿が印象に残った。とてもよいドラマだった。

○　ＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」を見た。最初から最後まで息をもつかせない展開で目が離せなかった。ドキュメンタリーとドラマを組み合わせた手法は優れていると感じた。現代の世相を見事に反映していて、現実社会の落とし穴をのぞいたような感じがした。三宅民夫さんがニュースを読む場面は、現実味があった。ストーリーにさまざまな伏線があり、飽きずに見ることができた。桃井さんや悪役の出演者たちの演技がよかった。若い出演者の笑顔が得体の知れないような表情で、闇の深さを表現しているようだった。母親の悲しみに追い打ちをかけるような詐欺の被害は、現代の高齢者の悲しみの象徴のようだった。現代の高齢者は幸せなのかという、成熟した社会の課題を突き付けられているように感じた。

○　ＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」を見た。見終わった後に深い余韻が残る、見事な完成度の高さだった。キャスティングや演技、印象的なセリフ、シチュエーション、ドキュメンタリーとドラマが融合したような斬新なスタイルといったすべてがすっと心に入ってきて、記憶に残るような作り方だった。情報量がとても多く、加害者しか知らないような手口が事実をもとに細部にわたって具体的に描写されており、専門用語や組織の構成、犯罪が出来上がるプロセスが浮き彫りになるなど、ドラマを見ているのに情報が得られるというとてもよい番組だった。受け子など関係者の取材にもとづき忠実に再現している部分と、ドラマとしての描き方のバランスもよく、加

害者の家族や被害者の家族の苦悩、当事者の気持ちの変化が中立的に描かれており、引き付けられた。犯罪に加担する子どもや若者の心情が胸に迫ってきて、深く考えさせられた。

○　ＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」を見た。詐欺の受け子やかけ子というピラミッド構造の仕組みやアジトの場面がリアルだった。疎遠になっている親子関係や、親や祖父母の家族愛を利用して犯罪を繰り返すといった手口の巧妙さが、ドラマにリアリティーを与え、未知の世界に迫っており、時代を反映していた。徹底した取材がリアリティーや奥行き、格調高さを感じさせるものだった。社会の課題を直視することで複雑な問題点が浮き彫りになった、すばらしい番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」を見た。よく調べたと感心した。詐欺の内容だけではなく、犯罪者側と被害者側の両面からその背景と原因、問題を抽出しており、社会の深層や課題を深く追求していた。ドラマの完成度も高く、社会の課題に肉薄したテーマの設定などを含め、ＮＨＫならではの番組だと感じた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル　ドラマ「詐欺の子」については、名古屋局報道部の記者チームが取材した事実にもとづきドラマとドキュメンタリーで構成したことに、大きな反響があった。

○　３月２８日(木)の「かがのとイブニング」を見た。新年度からキャスターが変わったが、さわやかでよいと感じた。「おくりいえプロジェクト」という、空家になって取り壊すことになった町家の最後を見つめ直す活動が紹介されており興味深かった。一方で価値ある町家をどう残すか、今残さなければ間に合わない段階になっているという点についても番組で伝えることが大事だと考えさせられた。

○　４月１日(月)の「新元号発表」関連のニュースを見た。ＮＨＫらしい報道でしっかりと伝えており、とてもよかった。日本のすばらしさ、深い歴史や文化を改めて見直すよい機会にもなったと思う。「万葉集」の紹介についても視聴者に感動を与える報道だったのではないか。

○　４月４日(木)の所さん！大変ですよ「“終活”最前線　棺(ひつぎ)が家に届いた！？」を見た。生前にひつぎを購入することや、遺影をきれいに撮影するサービスなど、初めて知ることばかりで驚いた。自分のことも含めて考えさせられる、衝撃的な番組だった。

○　４月５日(金)のナビゲーション「広がる＃毒親～ゆがむ親子関係～」を見た。「毒親」ということばの定義が紹介されていたが、親に対して悩みがある人がインターネット上で「毒親」ということばを拡散し、ことばの定義があいまいになっていくという現象に、不安を感じた。専門家やゲストのアドバイスやメッセージが、番組の軸を明確にしていた。「レンタルお母さん」やカウンセリングといった取り組みは、悩んでいる人にとって参考になったのではないか。

○　４月７日(日)の「２０１９統一地方選開票速報」を見た。大河ドラマを休止してまで放送する必要があったのか、疑問に感じた。国政選挙であれば放送するのは当然だが、今回は一部の都道府県知事や政令指定都市の選挙で、そこに住んでいる視聴者以外は関心がないのではないか。マルチ編成のサブチャンネルで放送することもできたのではないか。

（ＮＨＫ側）

国政選挙はもとより、地方選挙についてもきちんと報道することはＮＨＫの使命であり、理解いただきたい。今回の統一地方選の開票速報では全国放送の中で必要に応じて随時、県域放送などでも最新情報を伝えた。

○　開票速報についてはインターネットも組み合わせて新しい展開もできるのではないか。

（ＮＨＫ側）

選挙報道については放送だけでなくインターネットやデータ放送も駆使して地域ごとの最新情報をきめ細かに伝えている。今後も見直すべき点は見直し、視聴者の関心に応えていきたい。

○　４月１２日(金)のナビゲーション「あなたの町の病院はどうなる？始まった医師の働き方改革」を見た。地域医療の崩壊、医師の長時間労働について過労死ラインを超えた働き方をする医師を紹介するなど、問題をよくまとめたよい番組だった。今後、病院に中間の年齢層の医師が不足しているという問題や、医師の生涯賃金の問題についても番組で取り上げてほしい。

○　連続テレビ小説「なつぞら」を見た。主人公のなつの子ども時代を演じた粟野咲莉さんの演技力がすごく、とても魅力的だった。鋭い感受性の表現や純粋で一途といった子ども心の表現に、心を洗われた気分になった。時代考証もしっかりしており、心

に響く番組だった。

○　連続テレビ小説「なつぞら」を見た。粟野さんが他人の家に居候する居心地の悪さをうまく演じており、すごいと思った。祖父役の草刈正雄さんの演技もよいと思う。時代背景をうまく捉えており、まさに戦災孤児たちの生活はこの通りだったのだと感じた。核家族化が進む中で、祖父が孫の人間形成に影響を与えるという設定は貴重で、意味があることだと思う。

○　「たっぷり静岡」を見た。統一地方選挙前半戦のニュースについて、静岡市長選や浜松市長選の候補者の政策と、市民はどう思うかといった内容が連日きちんと放送されており、興味深かった。政治に無関心な層が広がる中で、政治が自分の生活にどう関わるかという視点は大切で、こういった取り組みに今後も期待したい。

○　３月２０日(水)のデザイン　トークス＋(プラス)「デザインハンティング　イン岐阜」の再放送を見た。短時間だったが、長良川や岐阜の伝統文化についてメリハリある内容だった。女性作家の河合幹子さんが日本の伝統である和傘に強い関心を持って、そのすばらしさを追求しており、とても興味深かった。河合さんが単に伝統を引き継いでいるだけでなく、和傘という伝統産業をいかに日常で使いやすくしていくかということに注力している姿に感動した。

○　４月１４日(日)のＢＳ１スペシャル「“脱プラスチック”への挑戦～持続可能な地球をめざして～」(ＢＳ１　後 10:00～10:50、後 11:00～11:49)を見た。プラスチックごみという環境問題について、地球環境をどう維持していくのかという大きな視点で将来の展望も含めて紹介しており、とてもよい番組だった。取材力の高さを感じた。ぜひ関連番組も制作してほしい。

○　４月１０日(水)の「三宅民夫のマイあさ！」を聴いた。ＮＨＫスペシャル「詐欺の子」について担当ディレクターが動機や思いを語っており、とてもよかった。社会に対して感じている課題に向き合い、ぜひ大きな視点で制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

こういった形でディレクターが出演し、制作意図を語る機会がもっとあってもよいかもしれない。

ＮＨＫ名古屋放送局
番組審議会事務局